

---

# GANTZ ~ Another dimension revival ~

まなつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GANTZ ～Another dimension review  
val～

### 【Nコード】

N5784V

### 【作者名】

まなつ

### 【あらすじ】

迫る恐怖。謎に包まれたもう1つの世界。それは既に始まっている。それぞれの想いが交差し最後に残るのは？裏切り者は？そして黒幕は……銃口の先に光を求めて知られざるもう1つのGANTZがここに眠る。

Prologue 『表裏一体』（前書き）

『まえがき』

1度 投稿したのを書きなおしたスピニアウトです。

作者は原作ぜんぜんくわしくないです。

原作ファンの方はよむと不快に思うかもです。

ストレスを感じた方はよまない様にしてください。

このお話には原作のキャラクターは一切でてきません。

基本的にオリジナルなものです。なのでまったく面白くないかもしれないです。

感想はいつぱいくれると とても助かります。

作者が泣かない程度に 言ってくれると嬉しいです。

それでは よろしくおねがいます。

## Prologue 『表裏一体』

2018年11月26日。

表裏一体。

出会いがあつて別れがある様に、光があつて闇がある様に、物事には全て『始まり』と『終わり』がある。しかし、いつが始まりで何をもつて終わりとするのか、だれが知っているのだろうか、だれが決めるのだろうか。

私を知るもつと前から、彼らが気付くずっと昔から、それは生まれ形を変え、私達の社会に潜んでいたのかもしれない。彼は私にこう言った。「変革は過去の土台に成り立つてはいない。経過ではなく、終始なんだ」と。

私にはわからない。不要だから生まれ、必要だから作る。彼の信じていた秩序が意味するのは、正義なのか悪なのか。だから知りた。彼がなんのために生きて、彼らがなにをしてきたのか。そして、だれのために戦ったのか。

真つ赤な太陽が沈みかけるころ、武装した男達は建物の中から次々と引き上げていく。契約で動く者にとって時刻を示す針は、神の意思に等しく、たとえ苦楽を共にした仲間であっても、それにまさるものはない。ふたことめには、現金の支払い方法。USDルなのかユーロなのかなどだ。しっかりと契約を結んでしまえば、約束は必ず果たすし、決して裏切らない。だけど、融通が利かない。こんなドライな関係は、ついあの人のことを思い出してしまう。

乾燥しきつたコンクリートと埃の舞う広い部屋。大きな窓ガラス

が破られ、天井の監視カメラも破壊されていた。おかげで照明を失い薄暗く、シャツの胸ポケットのペンライトが役に立つ。地下に同じような場所はいくつもあった。私がかこへ戻ってきたのは、この部屋だけがひどく損傷が目立っていたからだ。

ブーツが踏み下ろす音が、壊れたドアの辺りで止まった。

横顔に懐中電灯のスポットを照らされ、掘り返された床の中で作業をしていた私の手を止めた。

「ハルカ。ソロソロ日が暮レル。必要な物ヲ回収シタラ、今日八街マデ戻ロウ」

流暢な日本語を使うエドワード・ミラーが、街に戻るまでの時間を計算し、引き上げの合図を出したのだ。彼がこういった気を使うのは、初めてではなかった。買出しをした時も荷物を持ってくれたり、料理をする時も率先して手伝ってくれた。今回だって経済的な負担を気にして、時間通りにスケジュールを進めてくれているのだと思う。

「y e a . i s e e . 」と、私はエドワードに返事した。

エドワードは床のふちに立ち、一段下がった私へ手を差し伸ばしてきた。私は手に持ったペンライトを口に咥え、下に置いたりユックを背負ってから彼の手を握った。女性慣れした彼の腕は、まるでお姫様を扱うかの様に、優しく慎重に握り返し、力強く引き上げてくれた。笑顔で私に「ありがとう」というと、彼もニコツと白い歯をみせ「no problem」と返事をくれた。

エドワードはイギリス出身のアメリカ人で、元イスラエル諜報特務局、ハーモサッドのインテリジェンス・コミュニティーのメンバーだったそうだ。簡単に言うなら怪しい白人男性。年齢は39歳で

私の15上。アメリカ人には珍しいくらいの童顔で、30代とはとても思えない。坊主頭を除けば、これといって身体的特徴はないが、イケメンに思えるのは欧米人の特権なのかもしれない。今は私のボディーガード兼パートナーとしてToe<sup>トイタ</sup>terの調査をしている。

私の父が最も信頼する部下、安藤さんの紹介で出会い、もう2年以上もエドワードと行動を共にしている。日本語が堪能で多方面に顔が利き、私の話を疑いなく聞いてくれる。こんな都合のいい人がいたなんて、安藤さんにもエドワードにも本当に感謝している。

最後に私とエドワードが揃って建物の外へ出た。

建物の前には先導するジープ、後ろにトラック、そしてまたジープと3台の車が並び、すぐにでも走り出せるようにエンジンが低い唸りをあげて停車していた。車両の外には、数名の傭兵が立ち、両手にもったライフルで周囲を警戒しつつ、私達が車に乗り込むのを待っていた。

360°見渡す限り砂しかない砂漠では、陽が落ちることに冷え込み、日中の灼熱が一転マイナスにまで落ち込む。到底、人間が住むには適した土地とは、私には思えない。こんな荒れ果てた土地のど真ん中に建設された廃墟で、過去に苦しめられた人々がいたと思うと胸が痛くなる。

環境に似合わない優しい風で、舞った砂が視界を遮る。

長い前髪を丁寧に横へ流して、胸元にひっかけてサングラスをか

けた。  
最後尾のジープへ先に乗り込んだエドワードが、車内から手を差し出し、後部座席へエスコートする。私が彼の隣に座つたのを確認すると、外にいた傭兵が、バタンツ、とドアを閉めて助手席へ乗り込んだ。だれかの指笛を合図に、車列は砂埃を巻き上げながら街の

ある地平線へと移動を開始した。

事の発端は、私が学生時代に読んだエードリッヒ・ベツフェム博士が、自分の論文を元に書いた『Talented』という著書を読み返したのが始まりだった。500ページに及ぶ著書にこうあった。

第2章 一般能力の向上価値 87頁引用

『これまで脳科学、人体工学、力学などあらゆる見地から実験を重ね、論文でも論じた通り、人には先天的に等しく備わる能力があり、一部の障害者を除けば決定的な優劣の差はほとんど無く、日常生活において支障を来さないが、これをインターパーソナル、イントラパーソナルの視点から該当能力を正しく導き出し、集中的なプログラムにより学習させることで、類稀なる能力の付与、向上が可能であると証明した。この結果は、従来のギフトッドやタレントッド教育における概論的教育方法とは違い、多重知能の発展向上を目指すものと異なる。簡潔に言うならば、もっと細分化された動詞的能力を一点集中するプログラムが必須であるのだ。つまり、ある一点における事柄や動作の天才を意図的に創造することが可能であると言え、また優秀な細胞、多重知能の持ち主であれば相対的な向上も見込めると断言しよう』

博士の論文が学会で発表された当時、世界が震撼したのを私は未だに覚えている。要約すると、それまで哲学的なニュアンスだった「才能はだれにもある」という言葉を理論上実現させた。博士は著書の中で、あえて「動詞的能力」と述べているのは、食べるや走る行動に関連するだれもが持つ能力を博士の学習プロセスで学べば、短時間で超越した能力を開花させられるという意味だった。つまり、才能の有無に関係なく、だれでも一定の動作に天才的な能力が発揮でき、才能をもつ人なら確実にそれを開花させられるというものだった。こんな夢のような話に興味をもたない人はいなかった。だけ

ど、博士は著書の中でこうも言っている。

第8章 コントロール 502頁〈引用

『敢えて言うなら向き不向きである。例えば、数学が好きでも向いているとは限らない。またその逆も然り、いくら不向きな能力を磨いたとしても、一定以上の成果は現れず無意味に終わってしまう。要するに能力の判別が必要になるが、未だ定まっておらず、DNAテストや優位統計の結果からでも確実な情報は導き出せない。必ずしも開花するとは言い難いのだ。そして、忘れてはいけないのは、向いていたとしても好きではないかもしれないということだ』

人には能力の向き不向きがあつて、同時に好き嫌いもある。無作為に学習させるのは、非効率で結果無駄になるかもしれないし、判別する術は今のところ見つかつてはいないらしい。そして、博士がもっとも強く言いたかったのは、向いているとしても本人が好ましい学習を強要するのは、人道的見地からみてもものすごく野蛮だということだったと思う。だから、博士は判別方法を発見するため、研究を続けようとしたんだと思う。

私にとって著書の一番の興味は、博士が研究対象を変えた理由。著書の結論にあった。

第8章 コントロール 520頁〈引用

『しかし、研究の継続はある被実体と出会ったことで中断を迫られた。次世代の能力。実に魅力的で、また夢の様な出会いである。例えるなら皮膚細胞を培養させるNIH3T3細胞の変わりとなる細胞を発見したようなものだ。私はこの次世代の能力、無から生み出す能力を解明し、更なる可能性を追求したいと思う』

博士はこの著書を世に出した数日後、不慮の事故で亡くなり、現存した研究は公表されることも、引き継がれることもなく世の中か

ら忘れ去られていった。私はあの時、この本を読み返さなければ、あの人の言葉を信じられず、彼らの戦いに気付かなかったと思う。もちろん、『センス』と呼ばれる者達の存在も知らずに、平穏だと思い込んだ世界で新たな秩序がくるのをただ待っていただけだったと思う。

「ハルカ」

「ん？」

荒れた道なき道を走る車内で、本を開いた私にエドワードが話かけた。

「僕八、思う。宗教ヨリモ、人種ヨリモ、根深イノハ、復讐心ナンダト」

「うん、そだね。一番、虚しいのもね」

「y e a、ダカラハルカ、復讐ヲ原動力ニスルノハ、キット……」

「わかってる、エドワード。ただ、約束したんだ。あの人の助けになるって……」

Prologue 『表裏一体』（後書き）

『あとがき』

おつかれさまです。

読んでくれてありがとうございます。

もう気付いている通り『駄文』です。

書き方や言葉の使い方が ぜんぜんだめなところが多いと思います。  
よかったら 指摘・指導してもらえたら嬉しいです。

あと 誤字脱字はおおめに見てあげてくださいという甘えです 笑

それでは これからも最後までお付き合ってください。 おわり。

## Episode 00 『むかしの記憶』

2011年7月20日。

街一帯をオレンジに染める夕日が、校舎の中へ射し込んだ。

夏至がはじまり小暑、大暑、快晴が続き気温が高まり続けるこの時期は、夕方と言えどまだ明るい。部活動の終了時刻は普段よりも1時間遅く、18時30分。

汗まみれのユニホームを制服に着替え、体育倉庫のカギを返却にきた生徒が、職員室のある三階から東階段を一気に駆け下り、友達の待つ下駄箱に到着した。こうして最後に残ったバスケット部員を見送った校舎は、日中のあの騒がしさが嘘のように静まり返った。

渋谷学園、渋谷中学校は、今日もまた一日を終えようとしていた。

三階の窓から漏れる明かりは、LEDに換えたばかりの職員室の蛍光灯。部活の顧問が、のらりくらりと残務処理を行う教員達と、帰りの一杯をどこで過すか相談をしている。これといって珍しくない日常のひとコマ。そんな平和から少し離れた場所で問題は起きていた。

職員室の扉を開けて、廊下を西へ数十メートル進むと、二階へ降りる階段がある。十二段からなる階段は、踊り場を通過してさらに下へと十段。二階の階段も同じように踊り場へくんだり、一階廊下へと繋がっている。どこの学校にも見る光景。だれもが見慣れた姿は、渋谷中学校も同じだった。この日以外は。

制服の短いスカートから出た細く弱い脚。膝から下、脛が直角に外側へ向き、右足の機能を完全に奪われている。痛みや苦しみよりも、驚きと絶望を残し、見開いた目の先には、窓の外を木陰から

飛び立つカラスの姿があった。

カラスの鳴き声が校内にまで響いたあと、廊下には生温かい空気の音が聞こえそうなほど、静寂が後を追う。

踊り場に両膝を突き、崩れるように座る少女。1階廊下へ投げ出されるように横たわる彼女をみて咽び泣いた。見開いた彼女の目は、二度と瞬きをすることはない。後頭部から流れた赤い液体。彼女の乱れた茶の髪は染められ、僅か数分の間に直径1メートルもの水溜りをつくった。無残な彼女の姿を踊り場の少女が目に見焼き付けたとき、逃げる、という本能的反応よりも早く、恐怖は少女の体を凝固させ、その場に釘付けた。

つい数分前まで少女と同じように生きていた彼女、岩田 一美の呼吸が停まったのだ。しかも、少女の目の前で。何が起きたのかも分からないほど一瞬の出来事だった。

「かずみ……」

返ってこないと知りながら、事実を受け入れられない少女は、何度もその名を口にした。嚙くわのように、辺りに響くほど大きくはなく、掠れた声はほとんど聞き取れない。

「何度、呼んでも同じだ。逃げたいなら好きにしる、俺はこれから後始末をする」

そう口を開いたのは、先ほどから少女の隣に立つ高橋 智久たかはし ともひさだった。智久は少女と同じ14歳の同級生。腰で履いた制服のズボンへ両手を入れ、第三ボタンまで外した白いシャツの裾すそもウエストへ綺麗に忍ばせている。うなじが隠れる長さの黒髪は、緩くクセ毛にアレンジを施したアシンメトリー。細く丁寧に整えた眉は、綺麗な顔立ちを際立たせていた。とても少女と同じ14歳とは思えない冷たく鋭い目は、一美の変わり果てた姿から一時も動かさず、話を続け

た。

「知ってるのはお前だけだ。どうする？」そう言うと智久は、少女の返事を待った。

犯罪の低年齢化は、年々ピッチを速めていた。すでにこの年には昨年の3.7倍に推移し、14歳以下の違法行為は、もはや珍しいとは言いがたかった。その背景には、ネット社会における倫理感の低下や不必要な情報の横行が原因と考えられていたが、実のところそれだけではなく、背後で動く大人達が強く影響していたのだ。

政府、行政は事態を重く受け止めていたが、経済不況や少子化問題、年金問題など多くの優先事案を抱えており、事実上にも対策を講じず、各監督管理組織は後手、後手に問題と向き合わざるを得なかった。そして、状況の悪化は、ついに殺人、売春、薬物、強盗にまでおよび、本格的な犯罪の視野を拡大していく一方だった。この現場もそうした事件のひとつにすぎないのかもしれない。

「返事をしないのは、諦めたのか？」

返答のない少女へ一方的な会話を進めた智久は一美から視線を移して言った。

「おねがいします」

智久の視線の先には、白いスーツを着た男が、横たわる一美の隣に立っていた。男は鼻にかかったチタンのメガネフレームを中指で押し上げ、智久を見返してかるく頷くと、後ろに控えていた男達に一美の処理を指示した。

スーツの男が格上なのは、身なりからすぐに推測できた。

シワひとつないスーツとシャツ。腕に巻いたパテックフィリップ

の時計。シャツの袖には、ダイヤでデザインされたカフス。パリツとした襟元にシンプルなネクタイ、中央にカフスボタンと同じデザインのタイピン。足元は光が反射するほど、磨かれた高級な革靴。スーツの男は、一美に群がる男達から一步後ろへ退き、清潔に手入れされた無精ヒゲを指で触りながら、その様子を眺めるようにみている。

踊り場の少女には、目の前の光景が信じられなかった。まるで映画のワンシーンをみているかのような錯覚すら覚えるほど、現実からかけ離れており、友達だった一美の死と併せて、涙が引くほどのショックをうけていた。

大きな袋へ一美の遺体を詰め込むのを確認したスーツの男は、踊り場の上の智久を見上げた。

「これはこつちで解体しておきます。適当に捨てたあと日を見計らって、若いのに自主させましょう」

言い終わると男は、智久の隣に座り込む少女へ視線を移動させた。

「ありがとうございます、安藤さん」

「いえ、会長のご命令ですから、それよりそのガキどうしますか？」

智久は安藤の視線を追うように、チラッと横目で少女を見下ろした。

少女は呆然と安藤の部下が掃除する、一美の流した血だまりを見つめていた。

「黙っていますよ。どこか適当なところで降ろしてやってください」

智久がそう言うと、安藤は一瞬なにか言いたそうな表情を見せた

が、ゆっくり智久を見返すと「わかりました。そうしましょう」と、はっきりした口調で了解した。

この日、人知れず大人達の手によって、ひとりの死の真相が闇に葬られた。

2007年7月23日。

深夜2時をすぎたある一軒家。

通りに面した二階の窓から電気の明かりが漏れていた。

四人家族の長男、雅紀まことの8畳の部屋。壁に貼ったサッカー選手のポスター。無造作に床に転がるサッカーボール。シルバーラックの中には、小さなテレビ、オーディオ、スピーカーが納まっている。

綺麗とは言えない部屋は、雅紀なりに整頓をしているようであった。雅紀が部屋に戻ってから1時間ばかり首を動かす扇風機は、連日つづく熱帯夜にさほど効果出せないまま、出窓の下のベットマットへ風を送っていた。ぐったり、と疲れ果てた雅紀の体は、寝苦しい夜にも関わらず、ものの数分で浅い眠りへ吸い込まれていた。

ひっそり続く深夜のテレビショッピングが、エンディングをむかえるころ、表の通りを通過するサイレンの音で、雅紀は目を覚ました。寝起きの体を横にしたまま天井の蛍光灯をぼーと、見つめる。17歳の誕生日をすぎてから一年、深い眠りについたことは一度もない。普段から研ぎ澄まされた身体は、レーダーのように周囲を感知し、自動的に音や物、気配に敏感に反応してしまう。もう普通の高校生とは違っていた。

額に吹き出た汗を手首で拭って、重い体をゆっくりと起こす。物

が散らかった机の上からリモコンを取って、テレビの電源を消す。静かな部屋に流れる扇風機の音。また机の上から、今度は新約聖書を手に取った。

コリント人への手紙 第一、第10章第13節

『あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます』

カトリックの高校に入学した雅紀は、敬虔なクリスチャンではなかったが、聖書のこの言葉が好きだった。自分が苦境に立たされたとき、幾度も支えられ助けられてきたからだ。今回も雅紀は折れそうな心で聖書に助けを求め、何度も読み直していた。しかし、読み返せば読み返すほど、神がなぜ自分に耐え難い試練を与えたのかという、疑問だけが大きくなっていった。

閉じた聖書を机の上に戻し、新しいTシャツとズボンをクローゼットから取り出すと、携帯電話を片手に部屋のドアをそつと開けた。ドアの隙間から廊下を覗き込んで、ひとつ大きなため息をつくとき、部屋をあとにして一階のお風呂場まで歩いてむかった。

シャワーのヘッドから勢い良く出る水に、少し苛ついた雅紀は、水に指をあてお湯に変わるのをしばらく待っていた。跳ね返るしぶきにオーバードラップする血しぶき。雅紀は、グツと、唇を噛みしめ、なんとか正気を保った。

まだ乾ききっていない髪のまま、ガレージに停めた中古のビッグスクーターのセルを回す。排気を噴射し、静かな住宅街に爆音を響かせた。何度かアクセルを吹かしてエンジンを温めてから、雅紀は

ガレージの外へスクーターを走らせていった。

スピードメーターが徐々に加速していく隣で、ステレオのイコライザーの数值が跳ね上がる。頭のゴーグルを下ろし手に力が入った。さらにタイヤは加速し、小さな交差点の赤信号を突っ切り、アクセルを回すエンジン音を響かせながら一本道を走り続けた。とつくに制限オーバーになった速度でも雅紀のアクセルを握る手は緩むことはない。時速85キロまで到達した風が、雅紀のもやもやした頭の中をすつきりと鮮明にさせた。

雅紀の恐怖心は完全に麻痺していた。所詮、機械しよせんが与える恐怖など、人間の持つそれに比べたら他愛もない。こびりつく臭いも、減り込む感覚も、こだまする叫びも、それ以上の恐怖を機械は雅紀に与えることはできなかつたからだ。

桜の並木道にスタンドを立て停車した雅紀は、土手の芝の上に腰を下ろした。

土手から見下ろす大きな河は、ゆつくりと確実に川下へ流れていく。対岸に見える同じ年頃の男女のグループが、深夜の水遊びを楽しむ声が、たまに微かだが聴こえてきた。雅紀は両腕を後ろへ回し、芝へ手を突いて体重を支えるようにあぐらをかいて、そんな風景をみつめていた。

新小平の駅から徒歩15分ほどに位置するこの並木道は、都市開発から逃れた数少ない田舎町の中にあつた。春になると満開になる桜の下を新人生や新社会人が、新たなスタートを実感しながら駅へむかう姿をみかける。夜には花見客が土手に押し寄せ宴会をし、並木道には出店が並んで賑わう。夏になると今度は、緑の葉が鬱蒼うつそうと茂り、蝉しぐれに包まれ、川べりで花火をする若者や祭りの時期には、商店街の提灯ちようちんのもと再び出店が並び、春とは違った賑わいを見

せる。

河から吹き上げる風が、蒸した体を撫でまわし、体温の上昇を防いでくれた。雅紀は目をとじて、気持ちの良い風に当たりながら、この時ばかりは忌々しい記憶を忘れることができた。

パキツ、雅紀の背筋に緊張が走った。

小さく踏みつけられる音は、蝉の鳴き声で掻き消されたが、雅紀の異常な聴覚は聞き逃さない。枝どころか、むしろ芝を踏み付ける音、気配すら取りこぼさずすっかりと捉えていた。風に揺れる葉に、よりいっそう鳴き声を強める蝉。その間を縫って微かに聞こえる足音。雅紀は目を閉じたまま背後の気配を感じていた。

5メートル。3メートル。2メートル30センチ。

それで気配を消しているつもりか、と思う雅紀の頭の中には、すでに自分を取り巻く空間がほとんど狂いなく描かれていた。背後に迫る気配を間近で感じると、自動的に腕の筋肉が、予測した攻撃に対して調節していく。心拍数はそれまでと何ら変化もなく脈を打つ。雅紀は何も気付いていないくらい落ち着いていた。敵がだれであれ、今まで幾度となく受けた不意打ちよりもお粗末な動きに、同情する余裕すらあった。

雅紀の能力にまつたく気付いていないのか、気配はそのまま背後でとまった、瞬間、雅紀が空気の乱れを感じた直後、肘ひじが後ろへ少しダッキングし左肩を落す、同時に右へと首を傾けた。

「……え」

敵は自分の攻撃が交わされると想定していなかったのか、間抜けな声を漏らした。しかし、すでに繰り出した攻撃を退くには遅すぎ、雅紀の頬をかするほどギリギリの距離でかわされた武器、勢いを緩

めず雅紀の背後から前へ。

グッ、と雅紀の右手は相手の手首をしっかりと掴んでいた。この時点で、相手の攻撃を封じ反撃のチャンスを作り出した雅紀に軍配はあがっていた。

雅紀はゆっくり目をひらいて、目にかかった前髪の間隙から敵の手にもつ武器が目に入る　ビール。

「あれ……」

呟いたのは雅紀だった。

かわした武器だったはずの物は、500ミリのハイネケンの缶だった。拍子抜けした雅紀は、背後の人物を確認すると、木村 優斗の姿がそこにあった。

「なんだ……ユウトか」

「気付いてたなら教えてくれないか？　マジ、はずいから」

「なら、もつとこつそりこいよ」と、雅紀が鼻で笑って優斗に答えた。充分、忍び寄った優斗には、雅紀の答えが不思議に感じた。

バシッ、と雅紀の気の緩んだ頭にかかるく衝撃が加わる。「イテッ」と、思わず声を出す雅紀。「なんだって……」ともう一度振り向くと、優斗は不快な表情で雅紀を睨んだ。

「いい加減、離せよ。手」

雅紀は優斗の手を握り締めたままだったことに、ようやく気付くと「わるい」と言ってから手を離し、ビールを受け取った。

優斗は赤く手形が残った手首を上下に振りつつ、雅紀の隣に腰を

下ろしてから言った。

「なんなの、その握力。バカじゃねえの」

「ゴチ」

プシュ、と雅紀はビールの口をあけた。優斗の話聞き流して飲んでから「うまいな」とひと言。優斗はあきれがおで、「はい、おつかれ」と合わせてビールを飲んだ。

優斗は雅紀の同級生で、同じサッカー部の部員。雅紀にとって櫻井亮に並ぶ仲の良い友達、いわゆる親友だった。1年生のころに同じクラスになって、すぐに仲良くなり付き合いは3年生になった今でも続いている。その仲について語ったことはないが、語らずとも知れた仲であるのはお互い感じていた。

優斗の整った顔は、学年中が認めるイケメンで常に女子生徒との噂が絶えなかった。本人はそれをひけらかさなかったが、自覚しており、また彼女がいない期間をつくらなかった。

「家には返ってないの？」

制服姿の優斗に雅紀がそう尋ねると、「ああ、あのまま学校終わってみんなと遊んでた」と答えた。

「もう帰ったのか？」

「まさか、もう電車ねえよ」

「あ、そっか」

「駅前のカラオケ。みんなそこにいる。俺、ぬけてきた、お前がい

ると思ったから」

「また、直感ってヤツか」

「あア」

雅紀は優斗の直感の話を度々、聞かされることがあった。

優斗にも良くわからないが、突然、頭に思い浮かんだ人や場所の未来が、予測できるような気がするという内容だった。最初、雅紀は偶然か気のせいだろうと思っていたが、優斗の的中率の高さにマグレではないか、という疑いはなくなり、それまでを思い起こせば、いくつもの心当りもあった。テスト問題をなんとなく書いた回答がすべて正解だったり、サッカーでもボールの転がったスペースに優斗の姿を多く見たり。しかし、雅紀は優斗のそれが直感というよりもっと別の力に思えてならなかった。

「ナツキは？」

「いたら来ねえよ」

「なんだよ、それ」

「終電で帰った。あいつ真面目だからなあ」

「つつか、ジミじゃないか？」

「ああ、まアな」

大島 なつき、彼女は別のクラスの女子生徒。女子の中心グループに属していたが、中で目立つような存在ではなかった。顔など見

た目も学力も平均的だった。しかし、優斗は1年生のころから気になる存在であったものの、話す機会に恵まれず、2年生のときに付き合っていた彼女が友達だったのを切っ掛けに、以降、仲良くしていた。しかし、それ以上の進展はなく、お互い近づかれずの距離を保っているようだった。

雅紀は優斗が大島 なつきに気があるのが、いつも不思議でしかたなかった。

「ナツキの何がいいの？」

「なんだろうねえ、なんかいいんだよなあ」

「彼女のほうが、ぜんぜん可愛くない？」

「そういうのじゃねえの。よくわかんないけど、一緒にいると落ち着く。なんか通じ合ってる気がする」

「なにが？」

「なんかだよ」

雅紀には優斗の気持ち、やっぱり理解できなかった。

大島 なつきに妥協する必要も取り立てて性格が良いわけでもない。なのに優斗には、自分でもわからない魅力を大島 なつきに感じていたのだ。だから、雅紀はこう言った。

「一回、付き合えば？」

「ぶられたらどうするよ」

「どつするって?」

「だから、彼女ふって、なつきにふられるのとか、マジかっこわるくない?」

「じゃあ、ナツキにコクってから彼女ふれば?」

「それどうよ」

「どつって?」

「だから、人間的にどうなんだよ」

「つつか、同じじゃねエ? 彼女いるのに、他の女に目移りするとか……」

「ばーか、思ってるぶんには、だれも傷つかねえだろ」

「はなし、かえるなよ」

「かえてねえよ」

「だれも傷つかなくても、思ってる時点で人間的にダメだわな」

優斗は長い髪をかきあげ、「うるせえよ……で、お前は?」雅紀の顔を真剣な眼差しでみつめた。雅紀には、優斗が訴える視線の意味は理解していた。雅紀は「ボクか……」とズボンのポケットから二つ折りの携帯電話を開いてみた。

「隠すなよ、なにがある?」

優斗には雅紀の様子が、ずっとおかしいと気がついてた。雅紀もまた、とっくに優斗には見透かされていると知ってはいたが、詳しい話をするつもりはなかった。

「女のことか？ 家のことか？」

雅紀は携帯電話をとじてから答えた。

「いや、なにもないよ、ボクは……すくなくとも、ユウトが思っているようなことはね」

「ウソつくなよ」

雅紀の答えは、嘘ではなかった。事実、優斗の考えているようなトラブルは、一切ない。もっと正確にいうならば、優斗の想像できるような問題は起きてはいなかった。

「もし、俺が力になれるなら……」

「ありがとう、ユウト。いつか、話せるようになる。その時がくるまで……」

不安げな表情の優斗は、雅紀の顔をみつめ、少し間をあけてから言った。

「……わかったわ。ムリすんなよ」

「ボクは、そんな気取らない」

「あア、知ってる」

Episode 01 『自主のりゆう』

2009年5月29日。

幸せってなんだろう。

愛してる人と過ごす日々、大切ななにかを思い出せた瞬間、それともプレゼントされたとき。だれにでも得られる些細なしあわせは人の数ほどある。その無数の幸福からひとつだけ選ぶとしたなら、私はなにを選ぶだろう。

ものにさまざまな形があるように、しあわせにもカタチはある。その感じかたや価値は人によって違い、時として異質で歪んだものへカタチを変えていくのかもしれない。しかし、たとえそうだとしても、人のしあわせを否定することができるのだろうか。邪魔をする資格があるのだろうか。万人へ与えられた権利を奪う資格が私にあるのだろうか。

私はおもう。幸せとは常に人が創りだした幻想の中に生まれ、その一時のために生きていける、他者の踏み込めない、踏み込んでほならない領域なのだ。

東京都千代田区警視庁本庁舎、第1取調室。

「間違いありません。私がすべてやりました」

その日、関係者がかたずをのんで見守るなか、男の口は静かにひらいた。

窓の外は鉄格子で固められ、天井から真つ逆さまに落ちる照明が机とイスの陰を床へつくった。灰色の壁にかこまれ出入口はひとつ。それ以外はなにもない部屋。そんな取調室の中で大人しく着席をしていた三浦 武被疑者の姿があった。拘束具をはずされ、手の自由を取り戻していたが、指を交互にからめ合わせるようにして両手を組み、机の上にあげていた。俯いた三浦の視線は机の上の手だった。ピカピカに磨かれた靴。きれいに折り目のついたズボン。ノリづけされた清潔なシャツ。おろしたてのようなジャケット。ヒゲはきちんと剃られ、散髪したてと思われる髪の毛と艶めかしい肌は、4歳とは思えないほど若々しく初老の衰えを感じさせなかった。失踪から四年、うち逃亡生活は三年。だけど、その甚い月日の経過を微塵もかんじさせない姿に、私は驚いていた。

取調官が三浦の前に座ってからまもなく、背中ドアが開いた。取調官は横目で立会人の気配を確認すると、カメラの起動スイッチを録画されているのを確認したあと、三浦との間にボイスレコーダーをおいてスイッチをおした。二、三度、取調官が小さくせき払いをした。

「コーヒーでも飲むか？」

物静かに取調官が尋ねると、「間違いありません……」三浦の自供がはじまった。三浦はすべての犯行の流れを話しおえるまで、一度も態勢を崩すどころか微動もせず、ハッキリとした口調だった。DVDの再生ボタンを押したように、一分の狂いもなく淡々と毅然とした態度というより、むしろ機械のように話していった。

すこし離れた別室。以前、取調室だったモニタールームで、管理官と一課長をはじめとする捜査官にまぎれて、私も連日その様子を見ていた。

事件のはじまりは三年前、新宿駅付近でホームレスが遺体で発見された。その後、老人、学生など年齢、性別、職業を問わず、次々

と無差別的に犯行がおよび28件もの殺害が決行された。当時、警視庁では東京都所轄管内で発生していたこれらの事件の関連性に気付かず、三浦の自供まで連続殺人事件だと断定していなかった。一週間以上にもおよぶ長い取り調べの間、三浦の身柄は警視庁で留置されることとなった。私は、モニタールームへ持ち込んだルーズリーフに、三浦の行動をできるだけ細かく書き記し、取り調べが終わると自分の席で捜査資料と見比べていた。

2009年6月7日。

「草?さん」

草?くすな 沙耶。さやか

これが私の名前。入庁2年目の新人刑事つてところ。国家試験?種のセミキャリア、といつてもノンキャリアと大した差はない。階級が巡査部長からはじまるおまけくらい。

「あ、はい」イスに座ったまま慌てて振り向くと、井ノ原いのはら 統むねの姿があつた。彼は後ろで手を組み、パソコンを覗き込むようにしていた。

ディスプレイを隠す暇もなく、苦笑い。「あ、えと、おかえりなさい」彼の視線は私のかわいい顔に移動して、ニツコリとした表情をつくり、「またですか……」と愛想わらいをした。「あ、これは、その……」私の目は宙を描きみつきかりもしない言い訳を考えるけど、彼が追い討つように、「コーヒーでも飲みますか」といった。

「す、すみません。神田ケーサツにいくようにって……」私の泳いだ目は、彼の黒目でとまり係長からの命令を白状した。

三浦被疑者が逮捕されて以来、捜査一課では取調官のあのくんだり文句が流行っていた。あのセリフのあと、三浦被疑者が全面自供したことから、すべて正直に話さない、という意味で用いられていた。

「ですよねエ」と、井ノ原は言いながら自分のデスクにむかっている。私はディスプレイの電源をオフにして、すぐ彼のあとをつけるように立ち上がった。

「どうして知ってるんです？」結んだ髪をほどき、何度か手グシをしながら尋ねると、「くつとき、係長がぼやいてましたよ。言うときかないって」そう答えながら井ノ原は席へ到着すると、イスをひいて手荷物をデスクの下においた。私は彼のうしろに設置されたサーバーからカップにコーヒーをそそいで、砂糖とミルクをいれると、着席した彼のデスク脇に、「どーぞ」とおいてから「じゃなくて、自供のはなしです」といった。

「ありがとうございます」お礼のあと「むこうでも有名な話ですよ。やつとウラ取ってる段階なんですよ？ 実況見分もまだだつて……」デスクのカップをあげコーヒーを飲んで苦そうな表情を浮かべた。

彼は国家公務員工種のキャリア、警察庁の幹部候補のひとり。

私の五つも年下の上司。今年の新卒採用12名の中で、彼だけ私と同じ部署に配属された。よれよれのスーツに黒ぶちメガネ。ゆるめただらしめないネクタイ。細身で色白で、いかにも頼りなさそうな風貌。正直、上司だと思ったことは一度もない。

「数が多いですからね。最初の犯行から時期も経ってるし、今後どうなるんだか……」私はデスクの横に立ち腕組をしてそう言った。

三浦被疑者が証言した裏付け捜査は難航していた。証拠品は続々と押収されていたが、初期の犯行現場の環境は変化していて、実況見分は思う通りにいかず、また犯行にしようとした凶器などが多数あり、分析も長期化していた。そのため、三浦被疑者の身柄は未だに警視庁で一時拘留の手続きがとられたままだった。東京都に限らず、都市開発のすむ土地では、事件解決の遅延はその後の捜査に大きく影響を与える。また、今回のように被疑者の自白が元となる場合、身代わりの可能性など冤罪えんざいに対して神経質になりがちで、普段よりも慎重に捜査はおこなわれ、多くの時間を必要としていた。

井ノ原は腕時計を気にしたあと、キーボードへ手をおいてなにか作業を始めだした。

「それより草？さん、いいんですか。神田いなくて」

「主任もそんなこと言うんですかあ？」

「そんなこと……って、仕事でしょ」

「……だって、捜査員の手は足りてると思うし、わたしひとり行かなくてもよくないですか？」

強引に正当化する私に、「そういう問題ツスカね」とディスプレイにむかって、井ノ原はつぶやいた。

「主任は？ どうしてここにいます？」私の質問に井ノ原は、おおげさに驚いたような表情をして背もたれによりかかって言った。

「いやだなあ、まだここ僕の席ですよ？」

「わかってますよ。警察学校、もう終わったんですか？」

「あア、大学校ね」と私の発言を訂正しながら再びキーボードへむかった。

「ちよつと、父の頼みごとを……父はパソコンが苦手で、それで……。むこうにはちゃんと許可とってますから僕の場合」

「……ふうん。そんな大事な私の前でやってていいんですかあ？」

「草？さん、ドイツ語よめます？」

「いいえ、日本語もろくに……」

「なら、大丈夫です」

井ノ原は四月の人事で、警視庁捜査第一課 第二強行犯捜査 殺人犯捜査二係に配属され、ベテラン刑事を一瞬で追い抜いた素人。キャリアの人事は特殊だつて知っていたけど、彼の場合は輪をかけて特別だった。キャリアはふつう、警察大学校に勤務する時間が長く、それ以外は所轄で現場研修を経て警部に昇進する。ここまでで約一年。その後、課長待遇で2年間の現場経験をし警視へ昇格する。本庁に戻ってくるときは、管理官もしくは課長の席がまつている。だから、こうして本庁に配属されることも戻ってくることも珍しかった。

「よくわかんないですけど、タイヘンなんですな。いろいろと」そう言い残して、私は自分のデスクに戻った。

「草？さんも今年、昇進試験でしょ？ 大変じゃないですか」井ノ

原は、顔をむけず言った。私はイスに座りなおすと、「プレッシャーならやめて下さいね、余裕ないですから」と返しディスプレイの電源をオンにして、さっきまでの続きをはじめた。

井ノ原の余裕は、もちろんキャリアならではのもの。彼らには昇進試験というものはなく、勤続実績だけで自動的に出世ができる仕組みになっていて、対してそれ以外は、警部に昇格するまで試験をクリアしていかなければ、これ以上の出世はない。無試験で出世できるのは、殉職したときくらい。学歴など経歴によって受験資格はまちまちだけど、私の場合は2年間の勤続実績で受験の資格が与えられる。合格すれば警部補。今の井ノ原と同じになるけど、苦勞して同格になれるのは一時的なもの。差はすぐにつくし、父親を幹部にもつ彼ならこの先、どんな裏技がでてくるのか見当もつかない。

私の家柄は、エリートとはかけ離れた家系で、父は六人兄弟の末っ子。祖父から譲り受けた土地でマンション経営をする地主で、人の上でも下でも働いた経験のない、良く言えば、すれてない人格者。悪く言えば、ただの世間知らず。

母は四人兄弟の次女で、私の知る限り二十七年間ずっと専業主婦をしている。今はふたり揃って、余った土地にキャベツやトマトなんかの度がすぎる家庭菜園で暇をすごしている。

私はそんな家庭に生まれた、ひとりっ子のわがまま娘ってところ。高齢出産というのもあって、大事に育てられ将来は父の後を継いで、土地を転がす予定だった。と、思われていた。

### 『悠々自適』

取り立てて苦勞もなく、趣味なんかに打ち込めて子供の成長を見守りながら、NHKの受信料と政治家に文句を言っていれば、年を越せる。波乱な人生と比べれば、文字通り幸福な人生だと思つ。だけど、平和な家庭の中で、幸せそうな両親をみてきて思ったことは、「ああは、なりたくない」それだけだった。

両親を否定したくないし、そうするつもりもないけど、限られた人としてか接しず、なんの代わり映えのしない日々を送る。ある日、鏡に映る老いた自分の顔を見て、人生振り返っても、暇つぶしの足跡しか残ってなくて、自分の生まれた意味について考えてもみつからない。私はそうはなりたくない。せつかく生きていくのだから、自分の価値を知っておきたい。私がなにをどこまでできるのか、なぜ世に生まれたのか、年老いてそれを確認したとき、どんな結果でも本当の幸せを感じられるのだと信じているから。

しばらくして、機械音が小さく響く部屋の中で、大きなあくびをした井ノ原が、袖をすこしたくしあげ、また腕時計を気にすると、「ああ、もうこんな時間か」と独り言をいつてからパソコンの電源を落した。私はその声に、ディスプレイの陰から顔をだし、周囲を目で確認する。

閑散とした室内。受話器にむかう女性職員、コピー機の近くに立つ男性職員。課内庶務に追われる職員達の姿がまばらに映る。

帰りじたくを整えた井ノ原が、デスクの隣、通路を横切るとき、「お先で……おわッ」私は手を伸ばした。

「なんスカッ!?」見てはいけないものを見てしまったかのような形相で言った。私は腕をひっぱったまま彼に、「しい、声でかい」と人差し指を自分の口へあて、小声で言った。極力、目立たないように、この部屋を出たかったからだ。

「はッ!? 接見ッ!?」

喫煙室の自販機の前で、おおげさなりアクションの井ノ原は、私の言葉を繰り返した。私は、コクリと、うなずき彼の注意をひく。

「それって……」私は彼に二度目のうなずきをみせてから「三浦の」と答えた。ひとつ、ため息をはいた彼は、私のしがみつくように持った腕を振り払って言う。

「なに言ってるんスか」

「だから、三浦とちょっと話がしたいの」

「どうして？」

「むずかしいこと聞きますねえ。しいて言えば、興味。かなあ」

「興味……？」井ノ原はなにげなくズボンのポケットへ手を忍ばせた。

「そんなケーカイしないで下さいよ。ただ彼の行動に興味があるんです」

「け、警戒なんてしてないですよ」

「主任は幸せを感じる瞬間って、どんなとき？」

井ノ原は私の思い立ったような質問に少し戸惑った様子を見せた。

「と、突然、なんスか？ 藪から棒に……」

「わたしは食事後のたばこかなあ、やっぱ」と、井ノ原の戸惑いにおかまいなく、自分でした質問に答えた。

「ぼ、僕は、ハンバーグにえびフライついでるとき……ですかね」

と、私に習うようにいった。私は、ニタツと笑みをつくり、おちよくなるような口調で「それ、かわいすぎるし……子供みたい」というと、すぐに井ノ原は顔を赤らめて「べつにいいじゃないですか」と口をとがらせていった。

「みづら……」

「はい？」

「彼のしあわせってなんだったと思います？」

「え？」また私の質問に疑問符の表情を浮かべた井ノ原。

取り調べ中、私はずっと考えていた。三浦という男が、一番しあわせを感じる瞬間がなんだったのか。

「そりゃ……」井ノ原は、そこまでいうと言葉をとめた。28件の殺人を犯した人間のしあわせ。もし、繰り返すことが慢性的になっていたのだとしたら、なぜか。私には井ノ原がなにを言おうとしたのかがわかった。

「ちがうとおもう」私は独り言のようにそういった。

井ノ原が言い切らなかつたのは、遺族の気持ちを考えれば、「人を殺すのがしあわせ」と、そう口にするのはあまりにも残酷だともったからだと思う。けど、私の否定は、そういったニュアンスは全くなく、別の幸せがあったんじゃないかと思っていたからだ。

「知りたくないですか？」私が井ノ原の目に訴えかけると、彼は首筋を触りながら答えた。

「特に興味ないですよ。たとえば、興味あつたとしても、僕には草？」

さんの期待には応えられませんし……」

私は人の発する言葉っていつのを半分しか信じていない。

人は十分に三回ウソをつくって有名な話があるように、敵意や保身、善意のあらゆるシチュエーションにおいてウソをついてしまふからだ。だから、もう半分は人の行動を信じるようにしている。

「なにを言われるのかケーカイして、期待に応えられなくもないからウソをついたのかな」

井ノ原は小鼻をピクピクさせて、頬をひきつらせた。

「それ、どういう意味ですか……」

私はわかりやすい井ノ原の表情に、ふくように笑った。

「接見できる方法です。あるんですよ、主任」

「ないでしょ。僕、ちよつと前までただの学生ですよ」

「今は特権階級のケーブホですもんね」はーと。ってかんに笑顔みせとけば、悪い気はしない。この手のタイプは、人はいいけど損得勘定を捨てきれない。あとは頼み方しだいでどうとでもなる。

「父に頼んでも無駄ですよ。だいたい、そんなこと頼めるわけないでしょ」と、視線をそらした井ノ原は捨てるように言葉を吐いた。まだ、自分が隠し通せると思っっているらしい。

「主任は内向的な人なんですな。けど、そんな自分が嫌いでおそうつとしてる。それで気さくに話しかけてアピールするけど、内心、

人からどう思われてるか気になるから、やたら腰が低くなる」

突然の話題に井ノ原は、チラッと横目で私をみる。

「あと、能力は外見から判断されないと思っていて、自分にも自信がある半面、本音は評価に不安を覚えている。だから、プレゼントに父親から唯一もらった時計を執拗に確認して、自信を取り戻す作業をする。父親の手伝いも思いやりからじゃなく、周りとの差をつけたいからか、父親にもっと認めて欲しいからかなあ？」

私の話をじつと聞いたまま、井ノ原は澄んだ瞳でみつめていた。

「やめといた方がいいですよ、主任。できもしない分析をしようとするの。だれにでもできる芸当だって証明できないから……間違ってます？」

井ノ原は唾を飲み込み、ネクタイの結び目に手をかけた。

「緊張してます？ 普段、気にもしないネクタイ触って緩和させてる」

井ノ原の手はネクタイからサツと離して、頭をポリポリかいてから諦めた口調でいった。

「わかりましたよ、たのむだけですよ。ただ、一方的すぎませんか？ 僕になんの得もないと思いますけど」

「そおですか？ あると思いますよ……」

私は取調室の前で井ノ原が来るのをまっていた。  
廊下の先で一課長に丁寧にお辞儀をしたあと、足早あしはやに私の元へや  
ってくる井ノ原。

「一時間だけですよ。それと三浦に話す意志がなければ、すぐ終わ  
りにしますよ」

「はい。でも、チチになんて言ったんです？」

「勉強のためとだけ……しぶってましたけど、お願いしたら頼んで  
くれました」

「よかつたじゃないですか？ 主任もこれで一目おかれますよ。ピ  
ックタイトルの被疑者と接見した人なんていないでしょ？ 差、つ  
いちゃいましたね」

「その点は父もいい経験にはなると、賛同してくれましたけど」

「わたしと一緒に……」

「なにがです？」

「親に可愛がられてる」

「嫌みですか？ 草？さんのためなんですからね」

「はい。ハンバーグとえびフライおごってあげますよ」

取調室のノブに手をかけたと同時に、井ノ原の手が肩へのった。

「取り調べじゃないですからね」と、念を押す。「大丈夫、主任に不利になることしませんから」と返してからノブを回した。すると、ドアをあける前に肩へおかれた手は、力を増して私の行動を制止させた。

「ちょ、それトラブルあつたら僕に責任あるみたいに聞こえますけどツ!？」

「ケーブホでしょ。わたしはただの立会って思われてますよ。きつと」

「はッ!? 話がちがッ……」

井ノ原が言い切る前に私は部屋のドアを静かにあけた。

かけ時計の秒針の音だけが取調室にこだまする。正面の机の奥に座る三浦の姿があつた。くもりガラスの窓の外は18時をすぎ、暗くなりはじめている。最低限の自由しか許されないこの部屋では、目に映る情報はそれだけだつた。相変わらず、そんな部屋の中で三浦は両手を組み、じつと座つたまま微動もない。両足をとじ一点をみつめたまま、呼吸音さえ殺しているかのように、静かに私達をまっていた。

私は三浦へ近づいて、脇に抱えたファイルを机におき、横へ飲みかけのペットボトルの水を置いてからイスをひいた。私が座る前にジャケットから買ってきた缶コーヒーを取りだすと、三浦の視界にはいるように差し出したとほとんど同じタイミングで、背後から井ノ原の手が伸び、コーヒーは取り上げられてしまった。

「ちよつとツ!」すぐ振り向いて井ノ原に文句を言おうとしたとき、井ノ原は長々と説明をはじめた。

「便宜供与です。物を買ひ与えたら今後の取り調べで得た証言は、すべて無効になってしまふんですよ。タバコもカツ井も、この部屋では一切買ひ与えるのは駄目です」

井ノ原は自分のジャケットのポケットにしまい込む。

この部屋に入る前、彼の言っていた取り調べではないという矛盾が、どうしても気になって「取り調べじゃないなら」と、反論する。しかし、井ノ原はため息をついて、なんとも呆れた表情をした。

「あとから取り調べだつて言われるだけでも問題なんですよ。その際、便宜をはかったとか言われたら、証拠がなくても各方面に迷惑かけることになるでしょ」

「証拠がないならよくないですか？」

「否定する証拠もないってことですよ。非公式なら極力問題は避けるのは当然です」

私は無駄に正論をいう井ノ原へ「はい」と、しぶしぶ返事をした。納得したわけじゃないけど、ここでいい争ってる時間がもったいない。

「僕らが今からおこなうのは、取り調べではありません。なので、録音も録画も今日はしません。単に世間話だと思つて対応してください。その際の三浦さんの発言は、法的に効力はありませんから安心して話してもらつて結構です。もちろん、黙秘する権利は引き続きありますし、中断をしたいときはその旨を伝えてもらえれば結構です」

井ノ原の言葉を言い終えても、三浦は眉ひとつ動かさず、じつと

していた。まるで何も聞こえていなかったかのように、了承も拒否もない。そんな三浦へ井ノ原は繰り返すことなく、両腕を組んで壁に寄りかかって状況を見守った。

私は三浦とまったく同じ姿勢をとり、視線だけは彼に合わせる。彼の組んだ手からライン上は守られた領域。まず、そこを切り崩し、親しみやすさを与えなければ、きっと口は開かないと思う。

「お久しぶりです、三浦さん」

三浦は第一声に視線を一度うごかし私の顔を見た。そのすぐあと、また同じ位置に視線を戻す。

29日。別件で庁舎を出た直後、私に話しかけたのは三浦だった。当時は、今よりずっと顔色もよくふくよかな印象だったけど、今はあの時の面影もないほどげっそりしていた。食事もろくにしていないのではないかと思わせるほど。

物腰のやわらかな口調だったけど、あきらかに動揺した目と足の動きで、私はすぐになにかあることを直感したのを憶えている。はじめ三浦はボソボソとした声で話していて、私が聞き返すと大きく深呼吸をしたあと、改めてハッキリした口調で「人を殺しました」と両手を合わせて差し出してきた。これが自主の初日だった。

私は俯いた三浦を気にすることなく話をはじめた。

「あのとき、まだ自己紹介してませんでしたよね？」

「……………」

「わたしは草？、草？ 沙耶です。で、あつちの偉そうな若造が、井ノ原 統。彼にムリいってこの機会をつくってもらったんです。

本当は三浦さんとお話するのダメだって、あア、あの若造の方が偉

いんですよ」

すごいかわいい笑みを浮かべた私。それを無視する三浦。すこしムツとした表情の井ノ原。よくわかんないけど、だれもクスリツともしない部屋にすべった感が漂った。

「でもお、あれですよね。世の中って理不尽だと思いませんか？ あ、この場合、不公平って言った方がいいのかな。あアやって腕組んでるだけで、会社のトップになれる人もいるけど、わたしたちみたく頑張っても下っぱで終わる人もいたりして、真面目にやってるのがバカバカしくなりますよね」

さりげなく腕をほどく井ノ原は、腰に手をあてた。そして鼻から深く息をもらすと、すこしの間よそ見をした。

「たまに思うんですよ。あアいう人たちがいなくなったら、わたしはどんなに幸せになれたんだろうなって。もし、自分に力があれば消したい。自分が許せるなら殺したいです」

ピクツと三浦の指が一瞬、反応をみせた。

「三浦さんは、罪を犯しました。苦しい時期にのうのうと生きてる人が、むかついて殺した。見るだけでイライラするときってあるんですよね。だから、三浦さんの『ムシヤクシャ』って気持ち私にはすごくよくわかるんですよ」

「草？さん……？」 殺害を肯定する意見に、井ノ原は心配そうに私へ声をかけてきた。

「きつと、そういう人たち殺す瞬間、苦痛に歪む顔とか声とか、た

まらなく幸せに感じますよね？ そのあとの残された人たちのこと想像すると、なんとも言えないくらい嬉しくなりますよね？」

三浦の組んだ手は組み替えたり、指をトントンさせたり、落ち着きを失う。さらに言い続ける私へ顔をすこしだけあげると、曇った表情をみせた。

「あれ？ ちがいました？ もしかして、三浦さんの幸せって他にありますか？」

覗き込むようにそう尋ねる私から、三浦はまた俯き視線をそらした。

「たとえば……家族とか」三浦は組んだ手を崩しかるく拳を握った。

「三浦さん、四年前に会社倒産して行方わからなくなってますよね。まだ高校生の娘さんときれいな奥さん残して。たしか名前は……まりこさんと奥さんが、あけみさんでしたっけ？」

三浦のかるく握った拳は机の下へと隠れた。私も三浦に習うように行動をまねた。

「多額の借金は残ってますけど、なんとか利息分は奥さん働いてまかなってるみたいです。えと、失踪して保険会社が帰ってこないと判断した場合、保険金の三分の一がおりるって知ってました？」

「……いえ」ボソツと、聞こえるか聞こえないかの小さな声だったけど、確かに三浦はそう口をひらいた。

「そうでしたか。でも、三浦さんが自主しちゃったから、保険金も

ペアですよ。といつても保険金だけじゃ、借金の足しになるくらいで返済なんてできないですけど……あ、離婚も考えてるそうですよ」

三浦は無意識に腕や手を擦り出し、最初の落ち着きはすでになくなっていた。

「離婚、狙ってました？ 借金チャラにするために？ あア、でもそれなら直接、言えばいいですもんね。でも、おかしいですよ。順調に失踪してたのに、わざわざ自主するなんて……」

三浦はついに私と正面をきって目を合わせた。

「三浦さん。なにか、ウソをついていますか？」

「なんなんだッ？ あんた一体ッ！」耐えきれなくなったのか、今まで聞いたこともない洗い声で怒鳴った三浦から私は目をそらさない。

「大きな声を出してもダメです。三浦さんに主導権はないですよ」

「主導権……？」複雑な表情をした三浦は、私の言った言葉の意味など理解していない様子だった。私は、今度はめっちゃかわいい笑顔でいった。

「はい。怒ったって話を変えるつもりなんですし……というか、怒るのって変ですよ。他に余罪がないか、ずっと聞かれてきたわけですよ？ あ、もしかして、他のことでウソついてるとか？」

三浦は鼻の頭を掻くと、強く鼻をすするように一瞬、空気を吸い

込んでから言った。

「嘘なんてないですよ」

「そおかな。じゃあ、三日前の食事、なに食べました？ わたしうどんです。主任は？」

急に話題をふられた井ノ原は「え、あア、えっと、なんだっけな」と思い出そうとした。私は井ノ原の答えを聞く前に、三浦へ小首をかしげ答えを聞き出すようにもう一度いった。

「なに食べました？」

「たしか……ゼリーを頂きました。それ以外は……」

「ダメですよ。ちゃんと食べないと、だから痩せちゃうんですよ？」

「刑事さん……」

「沙耶。さやかです」と、訂正した。今度は「草？さん」と間をとったように苗字で三浦がいつてから続けた。

「どんなうどんでしたか？」

「コロッケをのつけたうどんです。駅前の立ち食いですけど……」  
すると、三浦は口元だけをニコツとさせた。

「いいですね……」

答えを聞いたあと、私もニコツと口元をあげていう。

「おいしかったです。お子さんのお誕生日は？」

「……え？」と、また険しい表情をする三浦「憶えています？」と尋ねると、質問に少し躊躇ちゅうちゆしてから答えてくれた。

「え、ええ。たしか七月……」

「生まれ年からおねがいます」というと、三浦は目を左右に動かして、しばらく考えだした。「七夕ですね。お子さん」と、私は娘の誕生日を教えると、三浦は思い出したようにいった。

「ああ、たしか……昭和63年だったと思います。でも、それが……？」

「べつに世間話ですけど、三年前の犯行を思い出すより、難しかったですか？ お子さんの誕生日」

私は、はじめて机においたファイルを広げて話す。

三浦は目を細めると、首らへんを触り出した。

「三浦さんは、記録してるように細かく供述してくれました。おかげで、それぞれ犯行で使った凶器もみつかったみたいで、余罪も十件あまり出てきましたよね。三年もの間、三浦さんなにをしていたんですか？」

緊張している。

「それは、お話したとおりです」

「そおですか？」

「なにがおっしやりたいんですか？」

「わたしは、三浦さんひとりで犯行はムリだと思うんです」

「私に共犯がいると？」

「いいえ。複数犯だとは思いますが、ムリというより、違うと思うんです」

「はあ？ 草？さん」口を挟んだ井ノ原へむけて掌をかざしてとめた。

「無秩序型の犯行動機なのに、まるで長年、計画していたかのような犯行は秩序型。目的もないようにみえるのに、遺体をイタぶっていることから性的サディズムの要素があると思えば、まったくその逆に一撃で殺害しているケースもあるんです。手口が明らかに違出し、都内に潜伏していたのに地理的には安全域が存在しない。まるで突然あらわれて消えているみたいに、都内都下を自由に動き回っています」

私は、目に力を入れて三浦の瞳の中を覗くように、グッとみつめた。

「三浦さん、なにしてたんですか？ 三年間」

三浦は、スッと手を伸ばし、腕へあてさすった。そして、ゆっくり息を吐いて、口を開いた。

「刑事さん」

私の目は井ノ原を見上げた。

「もう、終わりにしてもらってもかまいませんか？ 明日もあるの  
で……」と、三浦は井ノ原へ告げた。井ノ原はしっかりとうなずき、  
彼が三浦の両手に拘束具をつける途中、私は三浦から視線を逸らさ  
ずに尋ねた。

「あ、三浦さん」

「はい？」

「ついできて言ったら失礼ですけど、他の殺害事件で意見がきき  
たいんですけど、いいですか？ どうしてもわからなくて、動機が」

「私の……？」

「ええ、ある家庭で男性が亡くなったそうです。葬儀のとき、男性  
の妻は参列した別の男性を愛してしまっただらしくて、翌週、子供を  
殺害してしまっただみたいなんです。その動機がわからなくて、ど  
うしてだと思えます？」

三浦は、私の質問へボソッと「さア、わかりません。邪魔だった  
んですかね」と、残して井ノ原に連れられ、部屋の外へ出ていった。

「あア、なるほど……」

## Episode 2 『ひびの中に。』

2009年6月7日。

私はひとり取調室に残された。

左手に握ったペンを持ち替えて、右手の指に挟み勢いよく回した。回転の勢いが止まりそうになると、手の上からこぼれおちる。それをまた拾い回して落とすの繰り返しをしながら、自分でまとめたファイルをひらいて眺めていた。

初期の犯行から遡り、最近の犯行まで見直してみると、重要な点がぜんぶ抜け落ちてる。連続殺人犯には、いくつかの特徴がある。大きく分けると、秩序型と無秩序型。どちらに該当するかでプロフィールは大きく変わっていく。

秩序型は、計画性に優れ極めて知性が高い人物が多く、コミュニケーション能力にも優れている。嘘や人を騙すことにも優れていて支配欲求が強く殺害前に被害者と会話をするなどし、相手を人として扱う。逆に無秩序型は、計画性が低く知性も低い人物が多い。人との接し方が不自由で秩序型と違い、相手を人としてみていないケースが非常に多い。例えば、ふたり以上の複数犯がいたとして、犯行までの計画を練り指示するのは、秩序型。その計画の真相も知らないまま犯行を実行するのが無秩序型。といった感じにわけられる。他に地理的プロファイリングでは、犯人の行動を追って、どんな場所で犯行をはじめなのか、どんな場所に遺体を捨てるのかなど、日時、環境からも行動パターンをよみ、職業や性別、性格、次の犯行の予測ができる。犯行方法からは、被害者像や犯人の精神状態、目的、性格、職業、性癖、署名的行動などもわかる。まだまだ無数の行動における分析はあるけど、こういったように行動分析して犯人を導き出していくのが、犯罪プロファイリング。

私は専門家じゃないからそこまで詳しい調査はできないし、プロファイリング自体が単独で行うものではないから、正直、私の言っていることには説得力はない。だけど、素人でもわかるくらい、三浦の行ったとされる犯行には意志や目的が感じられない。まるで機械が選別した相手を不特定の人間が犯行をおこなっている。そんな印象しかのこらない。しいて言えば、三浦にも言った社会的弱者。これが共通点になると思うけど、ホームレスや老人、学生、など年齢性別もバラバラで、だれでもいいといった感じに思えてしかたがない。

ドアの開く音。誰かがこの部屋に入ってきたのは、三浦が出て行ってから数分後のことだった。背中から近づく革靴の蹴る音が、真横を通りすぎ正面でとまる。「わアあ」と、言葉にならない声を発したあと、三浦の座っていたイスのきしむ音が聞こえた。私はファイルから目だけをあげて、その様子を盗み見た。

予想した通りの男が間の抜けた様子でイスに座っていた。三浦を留置場へ連れて行ったあと、再び取調室へ戻ってきたんだと思う。井ノ原は無言のまま座り、しばらく眠そうにあくびをしたり、首をかいたり、寝癖の頭を触ったり、落ち着きのない子供のようだった。ファイルに集中している私に声をかけるのが申し訳ないと思っただのか、怒られたらどうしようか、とでも思っているのでしょう。一向に口を開こうとせず、私の気を引こうとする彼の態度がなによりもの証拠だった。

「なんです？」あくまでもしかたがなく、私から口をひらいた。「あ、いやア、草？さんって」「しらじらしく、かたい表情をつくって井ノ原の重い口がようやくやくひらいた。

「犯罪捜査支援室の希望なんですか？」

「FBIってこ？」と聞き返した。

2000年に初の公的組織として道警に特異犯罪情報分析班が組織され、三年後には科警研かけけんに犯罪捜査支援室が設置された。これが日本におけるプロファイリングチーム。小馬鹿にしたように言ったのは、米FBIのプロファイリング方法を教授され受け売りに近いマニュアルをうのみにする体制。独自の研究も進んでいるけど、プロファイリングの基礎となるデータが少ないのと、それを扱う科学者の質がわるいため、まだ有効的な捜査方法といえないからだ。

「えエ、まア、実績あげてるみたいですし、ゴツゴじゃないと思いますけど」

なんの義理があるのか、それとも万が一、私がかっこに憧れているとしたら失礼になるからなのか、井ノ原はかばうような言い回しをした。

「なんでです？ 興味ないですけど？」ファイルのページを一枚めくり、三浦の供述内容を読みつづけた。

社会学も人類学も専攻したわけでもない。私には敷居が高すぎるし、ごっこのチームには興味ない。だから井ノ原へ答えたことに嘘はひとつもない。

「冗談でしょ？」怪訝な声で井ノ原が机に片ヒジをのせる音が聞こえた。

彼の言いたいことはすぐにわかった。三浦との会話から私がプロファイリングをしているのだと勘違いしたんだと思う。だけど、私あの会話でプロファイリングをした覚えはない。「だって、さっき三浦の……」

「ノンバーバルです」井ノ原のつづきを聞く前に私はさえぎったあと、顔をあげて立てヒジをついた。掌へあごをのせ、ペンを持つ手はファイルのうえ。

「非言語的コミュニケーション。表情や声、動作から心理を絞り込む手法です」

「同じことでしょ？ 行動をみて相手を見抜くやつですよね？」

さも当然かのように井ノ原はいった。けど、正しくいえば別もの。ノンバーバルとは、言葉の通りで相手の動作や声のトーンで、現在なにを考えているのか、なにをしたいのかを推測する言葉を使わないコミュニケーションツール。決して人格や特性、私が井ノ原にしたようなことをするものじゃない。

「三浦にしたのはプロファイリングというより、嘘をついているかどうかを確認しただけです。流れでプロファイリングに近い感じになっちゃいましたけど、すこしちがいますね」

井ノ原は両眉を上にあげ、肩をすくめた。「違いがよくわからないですけど」

「とにかく違うんです。それとどっちも相手のことがわかるツールではないんですよ。統計的データの確率論的な可能性にすぎませんから」

心理学に関わる分野は、人の心がわかると勘違いしやすい。そんなわけがないと思っていてもついてもっともらしい口ぶりに説得されてしまいがちだけど、実際のところ、人の心や行動は無限じゃないに

しても無数。つまり、人が人をはかれるほど単純に人はできていない。あくまでも確率をしばり込むだけだ、ということのを忘れてはいけない。

「じゃ、草？さんは三浦と話して、彼がどう嘘ついていると思ったんです？」

「三浦は家族の話をしたときに、キンチョとケーカイをみせました。それまでの腕組同様、わたしと彼の間に手を組んだ防御態勢を崩してまで、続いてわたしが殺害に対して賛同し共感、尊敬の念まで抱くと、感情が強まり自己親密行動をとりました。これは家族と犯行に対してネガティブな反応です」

井ノ原はじつと私の話に集中した。

「ムシャクシャして28件の殺害をおこなった人物が、自分の罪と捨てた家族の話をされて不快を示すのって変です。で、食事には最低限しか手をつけていないと答えた。罪の意識がよみとれると思います」

再び持ち替えたペンをクシに見立てて、髪の毛をとくようになでながら続きを話した。

「けど、シリアルキラーやサイコパスが罪の意識を感じるのが異常です。そう感じたとしてももっとあとになると思うんです。たとえば、量刑をはかる直前とか。罪の意識は、もっと別のところ、奥さんやお子さんにあるかもしれないですね。あとそのとき、三浦はゼリーを食べたっていいましたよね？」

「あ、ええ、たしか」

「一番、飲み込みやすく糖分が豊富にとれる、頭の疲労を補える食べ物です。取り調べで疲労がたまるのはわかりますけど、彼は尋常じゃないくらい疲労感がありました。最初にあつたころより、げつそりしてましたから、その原因はまったく根拠ないんですけど、嘘をついていたから余計だったのかなって」

すると話に集中していた井ノ原がしゃべり出した。

「だから記憶力のチェックをした。だれかの罪をかぶっているんじゃないかって」

「ええ。そのあとずっと反応はネガティブでしたし、逃げるように部屋を出ていきましたよね」

井ノ原は一度、目をとじて腕時計を気にする。考え込むように腕組をして「説得力に欠けるなア」と言い出した。「どうして？」と私が尋ねると彼は背もたれに重心をかけて答えた。

「たしかに28件の殺人をひとりで行るのは信じがたいけど、欧米じゃ珍しくもないし、三浦は自主までして、容疑も余罪もあきらかになってきているんですよ。上層部も世間も注目してる事件ですし、くつがえすには根拠が薄すぎますよ」

井ノ原の言っていることは、ひとつも間違つてはいなかった。証言の中には犯人しかしりえない事実もあつたし、嘘をつく理由も不明。三浦の犯行をくつがえすなんて、真犯人が名乗り出たとしても疑わしいくらい容疑は固まっていた。

私はペンを鼻先に小さくバウンドさせ、すこし考えた。

「主任は、どうして人が自然や死を恐れて、神様や宗教に頼るんだと思います?」

「え?」突然の質問に井ノ原は、身をのりだして聞き返した。「どうしてだと思えます?」小首をかしげ再度おなじ質問を繰り返した。

「そりゃ、全知全能だからでしょ?」井ノ原は要領をえない表情で答えてくれた。

「ちがいます。知識がないからです。自然や死に関する知識が豊富なら神様や宗教とは、一向に関係ないと……」そこまでいうと、井ノ原はなにかを思い出したように言った。

「それローマ詩人、ルクレティウスの著書、『物の本質』……ですよね?」

「そおです」井ノ原はまだなにが言いたいのかわからない様子だった。

「今、関係ありますか?」

「自主したとか世間が認めないから逮捕するんじゃないってことです。罪を犯したから逮捕するんですよね? ケーサツは」

今度はピンツときたように井ノ原が、おおげさなジェスチャーでいった。

「僕は本質を見失ってないですよ。罪を犯したから自主もしたし、世間も注目するわけで、法治国家ならこの流れが正常です。だれも無実の罪を罰しようとはしません。で、僕の記憶が正しければ、こ

の国は法治国家です」

「……だとわたしも信じてますよ。でも、判断するのは人間で、間違った導きは往々にしてあると思いませんか？」

「過去に冤罪があつたのは事実だし、今後もあり得るとおもいますよ。ただ、この事件に関しては、草？さんの分が悪すぎますよ」

「わたしの判断が間違ってる？」

井ノ原は深く息をはいた。すこしのためらいを感じたけど、「はい」と答えた。

ムリもない。私だって自分の考えがすべてだと思っただけだし、腑に落ちないということ以外は、確固たる論証もないからくつがえすなんて到底ムリ。それでも気になるのは、事件の数と質、場所。

私は、べつのファイルから一枚のA4用紙を手にとって、机の上を滑らせた。「これは……？」そういつて井ノ原は手にした用紙を読むんだ。

「ん？ 特異犯罪情報分析班？ 道警の資料ツスか」

「そおです。88年の連続幼女誘拐事件、97年の神戸猟奇殺人事件、ほかにもいくつかの殺人鬼のこと書いてありますけど、それは彼らの査定評価です」

「へエ、分析結果は正常じゃないというか、異常でもないですけど、いわゆる殺人脳つてやつですよね」

「ええ。わたしが三浦へした最後の質問、おぼえていますか？」

素早く用紙から視線を私へ切り替えた井ノ原は「あれこの分析の質問だったんですか？」と尋ねてきた。私はファイルをとじて、机の上を整理して「そおです」と返事をした。この部屋に井ノ原が戻ってきてからはじめて真剣な眼差しを感じる。結果が気になっていゝることは一目瞭然だった。

「殺人鬼達はそろって『また会えるから』って葬儀を再会の切っ掛けに考えていたそうです。そのための子供は道具にすぎないんでしようね。でも、三浦は違かった。あくまで恋愛関係にある相手との継続を考え、苦渋の決断が子供の存在の否定に辿りついた。いい方は悪いですけど、もっともポピュラーな動機」

「だからって殺してることには……」

「質問が殺した理由ですからね。べつにその行為の正当化を論議してるわけじゃないですよ。いたって正常な思考、一般的といった方がわかりやすいですか？」

そういつてから私は席を立ち上がった。

「どうするつもりなんですか？」

私は、井ノ原のその質問に背をむけ、部屋のドアから出ていった。

2013年7月16日

東京ミッドタウンの一画に聳える3 Eyes corporationの本社ビルは、この年誕生した。ミッドタワーに並ぶ全長248m。階数にすると53階とミッドタワーより1階層低い造りになり、展望施設はなく飲食、ホテル、医療施設、ショップ、オフィスなど多くの企業をテナントに持つ超高層ビルとなった。一企業の投資で大規模な買収から建設まで踏み切ったのは、これが日本初で景気の低迷を微塵も感じさせなかった。今や電通の勢いを封じるまでの巨大企業として、その知名度は言うまでもない。

いつもと変わらない盛況ぶりをみせるスターバックスで、キラメルフラペチーノをオーダーし店内の窓際の席を陣取った篠原真理子の姿があった。真理子は昼休みの時間を利用し、大塚沙織相談にのろうと考えて待ち合わせをしていた。

ことのはじまりは、「話したいことがあるんだけど……」という沙織の内線電話からだった。先日、真理子が沙織へ連絡をしたときに、電話が繋がらないハプニングもあり、今日の相談はただならぬ予感がしていたのだった。だから仕事の調整をつけ約束時間より早めにこの場で沙織がくるのをまっていた。

時間より5分ほどすぎたところで、一通りメイクのチェックを終えると、お気に入りのショートボブを軽く指で整えて、ファンデーションの鏡をとし脚を組み替え、周囲を見渡した。ちょうどタイピングで、オーダーカウンターでソイラテを受け取る沙織の姿に目をとめた。「サチ、こっち」真理子はすこし声を張り、大きく手をふってアピールした。沙織もその声に気付き、早歩きをしながら真理子のまつ席へと腰をおろして落ち着いた。

「ごめん、ちょっと遅れちゃった」片方の目をつぶって謝った。真理子は沙織の遅刻に特に気にする様子もなく「え、いいよ。仕事なんだし、おつかれ」というと何事もなかったかのようにストローを

吸った。

店内には買い物客や仕事の打ち合わせなど、多くの利用客が賑わいの中、真理子達の席だけはすこし雰囲気が高く感じるようにみえた。とはいえ、会話に夢中な客が注目するほど目立ったわけでもなく、それとなく店内に自然と溶け込んでいた。

「今日、外アツいよね？」沙織のジャブ程度の会話は、いわゆる『つかみ』内容に当然意味などなく、この時期あたりまえの気温にあたりまえのことをいっただけだったが、真理子も合わせるように「アツいよ、きつい変わってエ」と、営業のつらさをアピールした。二、三分ほどして「こないだ電話したけど繋がらなかった」と真理子から本題へ突入した。「え、うん。携帯変えたんだ」と沙織が答えると「知ってる。教えてね、後で」と返事をした。「あ、う、うん」真理子は、沙織の電話番号の話を後まわしにしたことで、それより重要な話題を話すようにうながした。もちろん、沙織にもその意図は伝わっていて、なかなか言い出せなかった自分へ後おしをしてくれたのだと悟った。

「優斗からは？」なにかを探るように沙織は、突然たずねた。

「え？ えっと……」真理子は考えながら答える。というのも、相談の冒頭にまさか優斗の名前がでてくるとは思いもしなかったからだ。

「あいつがどうかした？ 昨日まで出張だったでしょ？」

「うん、なんにも聞いてない？」

「え、うん。今日から代休だし、連絡もなかったから、特になにも」

「そうなんだア」とつぶやくように沙織はいった。真理子は彼女の曇った表情からすぐに優斗との間に、トラブルがあったのだとそう感じ、「あいつとなんかあった？」と、探りをいれた。沙織はソイラテを口に含んでから「ううん、あア、うん」と返事につまった。

沙織と優斗が付き合い出したのは、二年前だった。当時、入社以来、真理子と優斗は同じ部署で働いていて、同期ということもあり仲良がよかった。そんなふたりが、ある日の会議で経理部だった沙織と出会い、話をしているうちに同期だとしるとすぐに打ち解け、同姓だったことと、沙織と正反対の性格に魅かれ、特別に真理子とは仲良くなれた沙織は、何カ月後に優斗を気になつていて、打ち明けたのだった。それ以降、真理子は優斗と沙織の関係を深めるべく陰ながら応援し、見事その想いを優斗へ伝えることができた。優斗も彼女の想いを受け入れ、良きパートナーとなった。いわば真理子はふたりの火付け役だった。だから、なおさら真理子はふたりの関係が気掛かりだったのだ。

「サチ、あとでもさきでも、どうせ言うなら一緒だよ。あいつがなんかした？」

真理子は内気で口べたな沙織を十分に理解していた。また、そんな女の子らしい一面を羨ましくさえ思っていた。だから、沙織をかばうような言い方をし、言い出しやすい環境をつくつたのだったが、沙織は唇をギュツ、と結び視線を真理子から逸らしたまま何も答えようとはしなかった。

真理子は沙織の反応をみて、唾を飲み込み彼女を困らせる問題が優斗にあることを悟り、さらにその内容が何かであるか、想像できなかった。

「……そっか」言いにくそうに、沙織の答えを聞く前に真理子が口をひらいた。

「でもさ、浮気くらいよくあることだよ」

「え？」沙織は視線をあげ真理子を見つめる。

「それは残念だけど、単に理性っていうのかな。ほら、男ってバカだし、あいつだってその男なわけだし、不思議じゃないよ。サチのことを愛してるのに変わりはないんだからさ」

「ちがうの。彼はべつに悪くないんだよ」沙織の否定に真理子はフツ、と優しく微笑み「いいんだよ。私だって今の彼氏にむかし浮気されたことあるし……あア、問題はその相手？」あくまでも浮気という罪を軽い捉えかたをさせようと気をつかう真理子に沙織は重ねていった。

「本当に違うの。彼は浮気なんてしてないし、そういうことする人じゃない。そういうのじゃないの」

沙織の自信たっぷりな言葉に、真理子は「そうなんだア」と優斗への信頼に関心する一方で、自分の先走った勘違いと経験の暴露で込み上げてくる恥ずかしさもあつた。

「な、なんだ……ちがうの？」照れ笑いをしながら真理子は、一気にキャラメルフラペチーノを半分まで飲み込んだ。

「うん、彼との間に問題があつたんじゃないよ」

「そつかア、そうなら言つてよ。私なんか恥ずかしいなア」

沙織は伏せるように真理子から視線をそらした。

「ただ……」

「ん？」

「わたしに問題があつて、引っ越したんだ」

「え？ 引っ越した？」

「うん」

「あの部屋気に入らなかつたの？」 釈然としないのは、彼女らの部屋に何度も遊びに訪れるたび、『いいなア』と口にしてしまうほど、真理子はうらやましかつたし、沙織も気に入っている様子だったからだ。もとは優斗のひとり暮らしで余っていたスペースに、沙織がはいって温かみのある、それまでの環境と違った部屋になってた。それを引っ越すには、よほどの理由があるに違いないと、真理子は沙織に尋ねたあとに思った。

「そうじゃないよつていうか、引っ越したのわたしだけ……」

「ふうん………はッ!？」

よほどの理由とは何かと考えていた不意をつかれた衝撃は、真理子にとって計り知れないものであった。沙織の言葉の意味するところは離別。今まで携帯電話の買い替えさえ真理子に相談するような沙織が、そんな重要な決断を相談もしないで実行した大胆さに驚かされたが、なによりも驚いたのは、お米におはし、カラオケにマイク、というほどの関係だったふたりが離ればなれになるという結果にだった。

「なんで？ どうして？」ついた言葉は真理子の考えよりもずっと早かった。

「ひとりでやってこうって思った」という沙織の唐突な意見は、真理子にとっては質問の答えにはなっていなかった。「あなた、わかるってことだよな？」無論、聞くまでもないのは、真理子本人が一番よくわかっていたが、当人の口からそう聞かすには受け入れることができなかった。

沙織は一度だけうなずいて答えた。真理子はきちんと頭で整理しながら冷静になると、キャラメルフラペチーノを最後まで飲みほしながら、疑問が脳裏によぎった。

「あなた、それ優斗には……？」聞くのが恐かった。この質問の答えも真理子は知っていた。でも、真実はきつと違つと僅かなありもしない期待が、そう質問させたのだ。

沙織は首を横へふるだけで答えた。「やっぱり」と真理子は心で確信したのと同時に、嘘であつてほしいと悲願に等しい感情があつた。「ゴメン……」とつぶやく沙織に「べ、べつに」とやつとの思いで答えた。大人の付き合いに口を挟むほど、野暮なまねをしたくない真理子は、その決断を曲げようと、なにかを言つつもりはなかったが、困惑の表情は隠しきれないでいた。

「なんで？」

二度目。真理子がそう同じ質問をしたのは、まだ沙織から納得のできる答えが返ってきていなかったからだつた。

「ずっとね。ひとりで考えてて、やっぱりこうするのが一番だつて思つて」

「なにそれ。わかんないよ」

まったく納得できない。と言った方が正確だった。

ふたりを導いた仲人としての義務に近い感情があったが、もはやそれは単なる世話好きな厄介者やかいものとの境界線。だから、ギリギリである『わからない』とニュアンスをまげていったのだった。

「だ、だってさ、あんたたち結婚するとかしないとか、なんかよくわかんないけど、勝手に盛り上がったじゃん。どっからそんな急な展開になっちゃうの？」

いつもの倍のスピードで発した言葉は、焦り。真理子が焦る必要は、まったくなかったが経緯を考えれば、それも納得できる話だった。

「実は、それなんだけど」沙織はひざの上で小さな拳を固めていった。

「それ？ 結婚？」

「……うん」

2013年11月8日

「まえに言ったじゃんよ……違っつて、2月じゃなくて3月」

冬に差し掛かった11月。

枯れ葉が舞落ちる秋が通りすぎ、すっかり坊主頭になった木々の下、肌寒さに自販機の青が赤に変わりきる季節がやってきた。そんなある日のこと、外回りを終えた営業マンが会社に帰る途中の歩道で、電話を片手に雑音をはねかえすほど、声を張りあげて来年の予定を先方に伝えていた。

黒のバッグにベージュのトレンチ。中に黒のスーツを着て、新品の茶の革靴を履いていた。真ん中で分けられたサラサラな髪の毛を風に吹かせて歩くその男は、櫻井 亮だった。

「忘れるなよオ、オレせつかく楽しみにしてるんだから……」

どうやら電話の相手は仕事仲間ではないようだった。

来年の新年会なのか、飲み会の予定の主催らしいが、店が決まったことを電話した相手にまんまと忘れ去られていたようだった。

電話をもった素手もそろそろ限界に近付き、持ち替えてコートの中で暖めると、もう近い会社までのみちのりを歩く速度をはやめた。

「えっと、同窓会の場所は……ちょっとまって」そういうと、電話から耳を離してスケジュールの埋まったカレンダーを立ち上げて来年の予定を確認した。

「あ、いい？ 七日の金曜19時。場所は、デンアクアールムって店。新宿な。だから、3月だって……」

憶えの悪い電話相手に気を取られていた櫻井は、すれ違った通行人と肩が接触してバランスをくずした。「あ、いてッ」即座に接触した相手の顔を見上げると「あ、どうも」と櫻井より先に挨拶をしてきた。「あ、こちらこそ、すみません」と丁寧に謝り、先を急い

だ。

「いやいや、おまえに謝ったんじゃない、人とぶつかっちゃって……」

また大きな声を張り上げ会社へむけて、歩いていく櫻井の後ろ姿を立ち止まったまま接触した男が立ってみつめていた。男はミディ・アムシヨートの髪を片手でかきあげると、青白い不健康そうな顔つきが髪の下から現れた。目の下にくまが目立ち、細い体。根元が色落ちした金髪で、「櫻井 亮」と呟いてた。

2014年2月24日

この世に産まれた時点で同時に死を約束された。それは何も俺だけに限った事ではなく、誰もが同じ。どんな高度な医療が発展しよう、どんなに偉くなるようと、絶対に防げない最後の瞬間がある。なぜ俺達は生存本能が与えられたのだろう。死ぬ為に食べて、死ぬ為に働いて、死ぬ為に寝ている。結局、避けられない死があると知りながら生き延びるその姿は、見込みのない延命治療と何が違うのか。実に残酷で不毛な本能。きつとこの世界にとつて俺達の生命なんて不必要で意味のないモノなんだろう。でなければ、不老不死は幻で終わるはずもない。

#### 現実逃避。

どんなに死を悟ったところで、事実から目を背け、目の前の喜びや使命感に保証のない幸せを夢見続け逃避する。そんないつ来るか解らない死を哲学するより、書類の束を片手に山積の問題を苦悩することの方が、ずっと効率よく生きて行ける。

終了のブザーが47階の会議室に鳴り響く。

後ろから順に蛍光灯の明かりが戻り、外の陽を遮断したブラインドが自動的に開いた。ほとんど同時に好き勝手、話し出す社員の声で室内はざわついた。俺はそんな室内で、ひとり黙々と手前のiPadと資料を整理しつつ、今回も時間きっかりに終えたプレゼンに満足し、笑みを浮かべて自画自賛した。午後に控えた仕事をそつなくこなせば、今日も冷えたハイネケンを美味しく飲めるだろう。

「木村君、良かったよ」

背後から俺の肩に軽く手を乗せた部長が、満面の笑みでそう言った。

3月に決算を迎える3月には、大きな会議が頻繁に行われる。この日も企画営業部を中心に、オペレーション、広報、総務、法務など、主戦力とバックオフィスを含めた部署の部長と主任クラスが集められ、今期の見直し点や来期事業計画、現存するプロジェクトの修正案について執り行われた。

「お疲れ様です。着地点の修正をもう少し頑張りたかったですけど、総務の目は厳しいですね」

「まあ、そう言っな。月末に1億規模の売上を出せたんだ。君の算出した通りに、ことを運べば年度末に奴らの驚く顔が見れる。見事だよ」

「ありがとうございます」

部長の労う言葉に一礼する俺の横目に映るのは、ため息を吐きなくなる様な社内接待をする同類達の姿。年功序列だか実力主義だか知らないが、ゴマ手にお辞儀するビジネススタイルは苦手だ。こんな光景を見る度に『よくここまで成長したもんだ』と呟きたくなる。かと言ってそれを真つ向から否定できない自分も情けない。

「押しでは引く。営業の基本ですから、この程度のプレゼンならいくらでも」

「ほう、言うようになったな君も。だが、それは入社当時私が教え

「た事だぞ？」

「はい、覚えてます。ですから、部長にご納得頂けているんですよ」

俺の言葉で更に気を良くしたのか、にやにやした表情で部長は俺を見つめた。

「その様だな。君にはこれからも期待しているよ」

そう言つと軽く手を挙げ部長は会議室を後にした。

自分の言つた通り動いていれば問題ない。そう言いたげな後姿を見送りながら俺は呟いた。

「時代遅れですよ」

マニュアル化された手法が通用するのは、保身に目覚めた権力者と政治家だけだ。あんたの踏み台にしてる土は常に進化している。そこに同じ柱は二度と立てられない。腐敗して倒れるのを待つだけ、ビジネスにおいて絶対は有り得ない。

俺は万年筆の蓋を閉めふた計算機とスーツの胸ポケットに入れ込む。手前の資料を片手に会議室の片付け要員と入れ替わりに部屋を出て行く際、中に入って来る真理子とすれ違った。『どうだった？』と視線を送る真理子に、俺は答える様に腰元に掌を彼女へ向けた。するとその手を軽く握るようにタッチする彼女は微かに笑顔を溢す。これが2人の間でいつしか決められたポジティブな合図だった。

真理子とすれ違った後、閉まりかけのエレベーターにギリギリで滑り込み先客の2人組みと乗り合わせた俺は、男達に会釈をして40階のボタンを押すと静かに2人組の後ろへ下がった。

「例の件。あのまま落とし込みしておけ」

偉そうに部下へ言い放った男は法務部長。

「しかしまだあれは……」

「次の予算会を通る。その為に今日わざわざ貸しを作ったんだ」

「本当に宜しいんですか？ 統括本部の決裁待たなくて……」

「彼らには何も解らんさ。会社を運営しているのは我々だ」

「ですが……」

「不平が出るならお前で抑えろ。業者ごときを調子に乗らせるなよ」

「……わかりました」

大柄な口ぶりとは態度は、上流工程を担う部署ならではのものだ。

納得のいかない部下の表情からそれ以上、反論の言葉は出てこなかった。

2人が45階で降りた後、俺は振り返りガラスに映った不愉快な表情を元に戻して下の街並みを見下ろした。

この世で最も質の悪いのは、子育てのベテランぶる親代わりと傲慢でバカな指導者だ。どちらも自分の行いが正しいと勘違いして押し付ける。人の想いや意見など聞く耳も貸さずに、大衆の面前で又ケ又ケと正論を語り出す。自分の器を理解していない能無しほど扱い辛いものはない。

ビル街を右往左往する人の群れ。街中を行き交う会社員達が埋め尽くす。

野心と打算。希望と熱意。

あらゆる人の想いが交差するその景色の中に俺は過去の自分を見ている。

常識に囚われたくない自分。人とは違う自分。

そうして独立したIDは次第に強い信念を持った。アイデンティティ

『俺が変えてやるっ』

しかしそれは茨の道を進み、無駄とも思える遠回りをすること。自分の信念を貫く為に従属し忠誠を会社へ誓わなければ、登れない壁がある事を俺は知った。だから逃げた。無くしたものがあまりにも大き過ぎたから、壊れたガラスの破片を拾い集めても二度と戻ることはない。これから先、同じ過ちを繰り返したくはない。失うものがあるからこそ護り、護るからこそたじろく。信念を持つば、いずれ他者と争わなければならない。その時、護るべきものは邪魔となる。であるならそんな凶器を捨て、目の前の流れに身を投じて安泰を手にした方がどれだけ幸せなことか。

「……………沙織」

フロアに戻り座席まで歩く途中で、コーヒーマシンでホットコーヒーを注いでから再び歩いて席に着いた。一呼吸しモニターの電源を点ける。画面に表示された社内メッセンジャーに、会議中に溜まっていた俺宛の用件が埋め尽くしている。

さて、プライオリティの高い案件から片付けるか。

「お帰りなさい、主任。今さっき大塚製薬から電話ありました。折り返しお願いします」

マウスを握った瞬間にこれだ。

仕事に追われるのは嫌いじゃない。でも、もう少し落ち着かせて欲しいもんだ。

「誰からだった？」

「山田さんって担当の方です。5月からのCMの件で……」

「あの人かあ、話し長いんだよなあ」

「ご愁傷様です」

「後で掛けなおすわ。悪いけどメッセ飛ばしといてくれないか？ たぶん、忘れちゃうから」

「りよおかいです」

打ち合わせ日時の変更。会議資料の作成の締め切り、取引先からの電話。部下の遅刻まで様々な内容に一通り目を通した後、現在リレーションの上手くいっていないクライアントのプレゼン内容を見直すことから手をつける。

カチカチとマウスを操作し出したとこでまた邪魔が入る。

携帯のバイブだ。スーツのズボンから携帯を取り出してディスプレイ

レイを見る。いつもなら忙しい勤務中に、プライベートの電話なんが出ることはない、デスクの上に置き去り仕事に集中するが、珍しい人物からのコールに思わずディスプレイをスライドさせてしまった。

電話を耳にあてると聞こえてくる懐かしい声。

「もしもし、優？」

「ああ、もしもし」

相手が分かっているながらこの『もしもし』と言っやり取り。無駄な事は知っているが、つい口にする。

「何べんもかけたんだけど、なかなか出てくれないから」

「会議中だったんだ。どうかした？」

「優の声聞くのもなんだか久しぶり、少しは連絡くらいくれても罰は当たらないわ」

「忙しいんだ。なんかあった？」

親から子へ電話が鳴るのは不自然な事ではない。しかし、息子と母親がママに連絡を取り合っつて言うのは、きっと少ない方なんだと思う。それも同じ都内、近場に住む親子なら余計、疎遠になりがちだ。だから、こっぴどした不意の連絡には、不安要素がつきもので何かあったのかと、つい勘ぐってしまう。

「特に用ないなら、悪いけど電話切るよ」

「親に冷たくして。お父さんが生きてたら……」

「やめるよ、その言い方。親父は死んだんだ」

端的に言わない母親へトーンを落として、やや気だるそうな声で言った。

激務に追われる中、時間は1秒でも惜しい。その苛立ちは、つい母親へあたってしまう。

「お兄さんもよ」

「え？ 叔父さんが？」

「今朝、連絡あつて亡くなったのよ」

そう聞き反射的に時計を見る。13:15。

「そう、それは残念だ」

「残念？ 言うことはそれだけ？」

「お袋やめてくれ、他になにを言えばいい」

「そうね、ごめん。亡くなった理由を聞かないから、あなた達うまくいってなかったものね。でも、お兄さんは最後まであなたのことを……」

「今、そんな話してないだろ」

「そつね、ごめんなさい」

17の時、俺は父親を亡くした。その代役を自ら進んで出たのが叔父さんだった。その叔父が死んだと聞かされて、不思議と悲しむことなく冷静な口調だったことに気が付いた。

驚きよりどこか納得できる話。

当に父親が亡くなってしているんだ。その兄である叔父が死ぬのは必然と言えた。今更、驚くことなんかない。歳も歳だし、遠かれ近かれいずれその日が来ると、一種の覚悟のようなものさえあった。そもそも何年も会っていない叔父の事なんか記憶の片隅にも無かったというのが本音だろう。

「お通夜は明後日で……」

「ちょ、待ってって」

『一親等でもない俺がなぜ……』言いかけた言葉を素早く飲み込んだ。

叔父と俺たち親子の関係を知っている人が、聞いたとしたらこんな白状な台詞は他に思い当たらない。それ以前に身内、それも最も近い存在が死んだんだ。世間体や柵しがらみに、破天荒な振る舞いができる若さは、もう俺にはない。

「優？ 優？」

「あ、え？」

「どうしたの？ ちょっと待ってって」

「あ、いや。葬儀はいつ？」

「明後日よ」

父親代わりを頼んだ覚えのない俺に、やたら執拗に迫ってくる叔父が苦手だった。思春期という多感な時期のせいもあつたが、自分の子供に手がかからなくなり、ひとり寂しい老後生活を目前にしていた叔父が、片手間で寂しさの穴埋めをする。俺の目にはそんな風にしか映らなかつた。自分の夫婦生活の失敗を棚上げて、父親ぶる叔父のそんな態度が気に食わなかつた。

男親ひとりで子供を立派に育てたという自信に満ちた表情。時に厳しく時に優しく、ハンドブックの筋書のような教育方針。度々、叔父の口から出てくる言葉は『お前の父さんが生きていたら』というもしもは、前進しようとする俺に後ろ向きな話でしかなかった。

『俺はあんたの息子じゃない』そう何度も言いたかつたが、母親の悲しむ表情をイメージする度、俺の歯止めになつていた。そんな環境に逆らう様に俺はそれまで以上に、家に帰る数を減らし、バイトの数を増やした。進学だつて父親の保険金で賄うことまかなで、叔父から経済的な援助を断り、できる限り接触を避けていた。

「27日か。随分、手配いいんだな」

「それはそうよ。お葬式だもの」

「そついうもん？」

「お父さんの時もそつだつたのよ」

「ああ、叔父さんが良く動いてくれたことは、散々聞いたよ……会場と時間メールしといて。仕事だからもう切るわ」

「そう、それじゃ……あつ、お兄さんはね」

なかなか電話を切らせてくれない母親に少し苛立ちの声で言った。

「さつき聞いたよ。脳梗塞だろ」

「え？ 言った？」

「ああ、聞いたよ」

「そう？ 最近、歳のせいかしら……この間も……」

「お袋、いい加減切るぞ。時間と場所忘れないでくれよ」

そう言うと俺は母親の回答を聞かず一方的に電話を切った。

2014年2月27日

俺は喪服で車へ乗り込む。

リモコンでガレージのシャッターレクサスを開けて、前日、洗車したばかりのLEXUSを走らせた。

1時間半ほどで都内から少し外れた田舎町へ出る。

大学卒業と就職の内定を報告に行ったのが最後だった。それから4年以上も経つ。都心部とは違い変わり栄えのしない当時のままの

景色が目の前に広がった。

そのうち会いに行こうと思いつながら俺は、仕事を言い訳に会う素振りすら見せず年月が経ち、結果その日が葬儀になるとは想像もしていなかったが、こんなことでもない限り最初から俺は会おうとさえしていなかったのかも知れない。

『はい。こちらが事件のあった板橋区の住宅街です。 昼間でも人通りの少ないこの路地は夕方になると一転……』

TVから聞こえる声へ無意識に耳を傾けた。

ここ最近、頻発している通り魔事件の続報を告げるニュース。大学の頃は、音楽やPVを流しながら運転する機会が多かったが、最近ではTVやラジオの情報番組をBGM代わりにしていることが多くなった。これも営業という仕事柄なのか、人と接する時間が長い俺には、LADY GAGAの新曲情報より社会情勢の方がよっぽど気になるニュースだった。大抵はどうでもいい内容ばかりだったが、知らないよりひとつでも多く知っておいた方が損はない。

『なるほど。それでは引き続き取材の方、よろしくお願いします。さて……どうですかこの事件。とうとう3人目の被害者が出たわけなんです……』

報道によれば、犯人は鋭利な刃物で年配の女性ばかりを狙いレイプ後、殺害するという決まった手口による犯行だという。当初は、カード類や現金を持ち去ることから金目的の犯行だと思われたが、その後の捜査で目的は別のところにあると発表された。

それに乗じる様にコメンテーターの意見も当初とは正反対のことを連ねるようになり、次第にヒートアップした彼らの口からは、いつもの警察批判と行政批判が始まる。そんなことを繰り返しに飽きたかと思えば次の報道に移る。おもしろおかしく効果音とナレーション

ヨンを入れた報道は、いくら奇麗事を並べても遺族感情を無視した行いに変わりはない。

「その前に異常性愛者を批判してやれよ。せつかく長生きしても最後がこれじゃ浮かばれない……叔父さんも70だったかな。死ぬには少し早いけど、おかしくない年齢か」

被害者の女性に比べれば寿命を全うできたと言えるだろう。

叔父はある意味で幸せだったのかもしれないと俺はそう解釈していた。

『死んでもおかしくない年齢』

そう自分の想いになにか引つ掛かりの様なものを感じたまま、車を葬儀場へと走らせた。

木村家葬儀場。

俺は香典と会葬者名簿に記入を済ませ、葬儀の一連の流れをこなしていった。

もう俺もいい歳だ。葬儀の手順や無礼のない程度の礼儀くらいは心得ている。しかし、いつしかそれは、心無きものへ変わっていつている様な気がしてならない。淡々と行う事務作業の様に、悲しい時。悲劇な場である事を頭に理解させ行動する。真に想う嘆きをどこかに追いやり、単に儀式に従うだけの機械的な動きでしかない。身内が死んだというのに、テレビに見る他人事の様な気がする。

何となくそんなことを考えながら、俺は火葬場から叔父の家に再び戻っていた。

客間に通じる長い廊下のガラス戸を開けて縁側を降りた。用意さ

れたサンダルを履き、スタンドの灰皿の隣に立ってコートからタバコを取り出して火を点けた。

口から吐く真っ白な息と灰色にくすみかかったタバコの煙が立ち昇る。

鼻から入る美味しく冷たい酸素が、タバコの味でその魅力を失い汚い煙が辺りを汚染していく。喫煙者なら1度は夢見る禁煙。仕事やストレスを理由に断念するオチの話は無数に聞かされ経験までしている。百害あって一利なし。やめることで得するのは理解しているつもりでも、タバコを握る指は止まりそうもない。

「禁煙外来でも行こうかな」

灰を落として未来の自分へ相談する。

「無理にやめる必要あんの？」

背後の声に振り返る。

「無理にでもやめないと、一生やめる機会なんてないよ」

「そうだね、優斗、久しぶり」

脚を外へ放り投げ縁側に座る少女。

毛先が肩にかからないまでのショートヘア。

綺麗な栗色の前髪が、幼い彼女をより幼く見せる。

「覚えてる？」

制服のスカートの上に片手を乗せて、開いた脚をブラブラさせながら、少女は俺にそう言った。何年も会ってない遠い親戚だった彼

女の顔を覚えていないが、下唇の隅にあるホクロは印象的だった。

「絢香……ちゃんだっけ？」

「そう、綾乃<sup>あやの</sup>」

「ああ、悪い」

「半分くらい覚えてた？ 可愛そうな女の子って記憶？」

「だいぶ会ってないから、そのせいだよ」

「あたしがこっちに来てから、1度も会ってないもんね」

「子供の頃、お爺ちゃんの家で、みんなと会ったきりだな」

「もう高3。今年で卒業なんだ」

「就職？ それとも……？」

綾乃は首を横に振り言った。

「どっちも……けど、進学はないかな。すぐこの家出たいし」

「……そうか」

祖父の姉の息子の娘。

現在では、叔父の娘。つまり俺の従兄弟で、最後に叔父が父親代わりになった子供だ。俺が大学3年の頃、彼女の家は火の海に包まれ家族は彼女を残して亡くなった。身寄りを失った彼女へ我先にと、

手を挙げたのは叔父で、すぐにこの家に引き取られた。

大家族だった祖父母の兄弟と子供達は、正月に決まって本家に集まって新年会を強制させられたことを子供の頃の記憶にある。彼女との関係はその時に会ったことと、奇跡的に同じ様な境遇になったこと。違いと言えば、親父は病死で、俺は叔父の家に引き取られたわけじゃないということくらいだ。

おもむろにブレザーからタバコを取り出した綾乃は、火を点けだした。その仕草に俺は驚きを隠せなかった。未成年だからという、つまりない理由からではない。

「タバコ吸うのか？」

「どうして？ 未成年だから？ それとも、これが原因で家族が死んだのってこと？」

「そうじゃない、ただ……」

「火が恐くないのか……。あたしのこと聞いてるんでしょ？」

「お袋と叔父さんが話してたのを小耳挟んだ程度な」

「中学生がタバコなんてって怒られてから2カ月後だった。一緒にやめようって言うてくれたお父さんが、夜中トイレに起きたとき、リビングの灰皿に吸殻入れたまんま、のんきにソファで寝てたんだ。マジむかついた」

逆ギレってやつだ。だが、中学生の考えることだ、解らないでもない。

「大人だからいいって、区別しなかったお父さんが好きだった。一

緒にやめようって言うてくれて嬉しかったんだよ」

でも、裏切られたか。

嘘はつくなという大人の矛盾にバツタリ出会ってしまえば、子供の気持ちは怒りや不信に繋がるのかもしれない。俺も彼女と同じ立場におかれていたなら同じことを思ったに違いないだろう。

「気付いたら目の前まで炎が迫ってて、家中が火に包まれてた。煙と嫌な臭いに囲まれてたのに、なんでかな。恐いとは思わなかったよ。逆に、なんだろう、安心感っていうのかな。凄く冷静で、ホツとした」

「よせよ」

「変だよ。お父さんも、お母さんも、弟も、みんな焼け死んでるのに、あたしはそんな気持ちになれた。あたしだけ助かるって不思議だよ……おじさんにもおんなじ話をしたんだ」

「綾乃」

「大丈夫だよだって。あたしは普通の子供で、どこもおかしくないって言うてた」

「やめろ。そんな話し、思い出す必要ないだろ」

「あるよ。中途半端な優しさでバレバレのウソなんて、あたし知らない。お父さんのふりなんてして欲しくない。そうだよ？ 優斗もおんなじなんですよ？」

俺は灰皿でタバコを消した。

叔父は、俺の母親にこの子のことで愚痴っていたのを覚えている。家事で家族を亡くしたショックが大きかったんだらう、とそんな風に話していた。

「いいや、違うよ。俺はそうは思わない」

過去は消せない。だから俺はそう答えた。

俺の選んだ道は、きつと間違っていたんだと思ったからだ。

もし、目に映った景色を否定し、叔父さんを受け入れていたなら、もっと楽な人生があっただんじゃないかって、そのときそう感じた。

俺は縁側を上り、綾乃を背中にその場を去った。

「ウソつきばかり……」

客間に入ると、畳みの上にくつつかのテーブルを繋ぎ合わせた長いテーブルが用意されていた。その上に食事や飲み物が置かれ、集まった参列者達を迎えていた。

生前の叔父の話をする者や久しぶりに顔を合わせた従兄弟同士が、近況報告などを話している。俺も適当な場所へ座り、そんな光景を眺める様に見ていると、ふと、頭の中に疑問が過ぎった。

『人の命は尊いものだ』こんな安っぽい言葉を宗教家達の口から良く耳にすることがある。それは本当のことなのかと、問えば決まって答えは同じ。誰の口からも飛び出してくる正論がある。しかし、必ずしもそれは事実とは限らない。もし、そんな正論が事実だとするのなら、今こうしてビールを片手に寿司を食い、バカ笑いをしている目の前の親族は一体なんなのだろう。骨上げを終えたばかりの彼

らに、一筋の涙の痕を見ることはできない。この光景が、故人を弔とむらひう儀式だというなら、『死』悲嘆』という当然の方程式に従った建前に成り立つ後付に過ぎない。

ある者はこう言うだろう。『寿命なら仕方がない』と。

手を尽くしてどうにもならないのであれば、それは仕方ないと區別するのが尊い命というものなのだろうか。俺もここにいる全ての人々も、いずれ叔父と同じ様に死を迎える。その時、ひとり残らず悲しみに打ちひしがれる者などいないだろう。いるとするなら、老衰でもなく、病死でもない『諦めきれない死』を迎えた時だけに限るのだと思う。

命が尊いのではない。尊いかは死に方によって決まるんだ。だったらそんな建前、俺は必要ない。

「優ちゃん？ 優ちゃん？」

「え、 あっ、 はい？」

先ほどから想いに耽る俺へ話しかけていたのは、親戚のおばさんだった。

「考えごと？」

「いえ、 まあ……」

「こつこついう場もあまりないんだから、一杯飲みなさいよ」

「順番に來ますよ」

「えっ？」

「あ、いや。オレ車なんで……。明日も早いし、そろそろ失礼しますよ。」

ビールを勧めるおばさんに、体のいい断り文句を並べて、グラスの上に掌を置いてその場に立った。母親に帰ることを告げ、俺は叔父の家をあとに家路についた。

Episode 4 3月7日 (前書き)

『まえがき』

タブーだって言われても、やっちゃうよ。視点切替え。笑

2014年3月7日。

真つ白に広がる世界が急速に狭まり、現れたのは暗く静かな世界だった。

ヘッドライトの中で俺は身動き取れず、接近する恐怖を受け入れるしかできなかった。衝撃に身を委ね、22時12分を表示する半壊したデジタル時計の残像が頭に残る。

この日、俺は死んだ。

25年という月日を思い起こせば、長くも短くもあつた。

人生、最後に知った事実は、死に際の走馬灯。誰が言い出したのか知らないが、迫る死の前に過去の記憶は振り返らなかつた。流れる時が止まったように、現実を映すだけだつた。

まさか、という思いは一瞬。止まった時間とは逆に、状況を理解するのに時間は必要なかつた。

母親は大丈夫だろうか、と今さら蔑ろないがしにしてきた親へ後悔が募る。笑えてくる。何もできなくなつた今、初めて息子らしい心配をしている自分が滑稽こっけいで仕方がない。父親が生きていたのなら、そういえば、彼は最後に何を考えていたのだろう。俺が小さな頃から彼が亡くなるその時まで、強くたくましく生きるように教育されてきた。いずれ持つ大事な人やモノを護りきる、豊富な知識と多様な経験を身に付け、力を与えたかつたのだろうか。俺に何を教え、何を託したかつたのか。

彼の死後、美化した父親像を当てにする自分が嫌いだつた。いつ

までも前に進めないような気がしていたからだ。いずれ知る父親の気持ちだと放っておいたが、今になって無性に気になっている。これもつまらない笑い話だ。

少し疲れた。もう、考えるのはやめよう。

誰もが避けられない死が訪れただけ、大したことではない。この為に今まで生きてきただけ、恐ることはなにもない。悲しみはいずれ風化し、俺のいない世界では変わらない日常が始まるだけだ。恐ることは……。

「ふるえてんぜ、死にたくねえってか」

2014年3月7日。

10時00分、部屋のデジタル時計が、切り替わり目覚めたくもない朝がやって来る。リビングに設置された大きなシャンデリアと、気品あふれる高級なソファ。無駄しかない資本主義なホテルの1室で、昨日からつけっぱなしのテレビには、節電を訴えるCMがしきりに視聴者へ警告する声が聞こえてる。

酔い潰れた女が、セックスをする前に浴びたシャワー。

1分間に12リットルの水が、昨夜から勢いを緩めず流れる音が

聞こえてくる。

日本じゃ意味なく流れるあの水は、つまらない教養のあるヤツらに言わせれば、アフリカ難民の命を何人救えたかを頭の計算機で弾き出すんだろ。

オレの知った事じゃねえ。

平和で裕福な日本に産まれてから19年間、他の国のことや、自分の国のことすら、まともに考えた覚えはない。なぜか。考える必要がないからだ。今あるべき生活を保っていけるなら、余計なことを考えるのは無駄だ。オレに言わせりゃ、どうでもいい他人の命を、あーだ、こーだ、と言うよりも、10時からひっきりなしに鳴るクソうるさいモーニングコールの音の方が、よっぽど気になる。

ベッドルームの中央に用意された、キングサイズのベッドの中で5分間うずくまっていた。

「ねえ、カトケン。出て……うるさい」

女が男を選ぶ基準を知ってるか？

か弱い自分を守ってくれる男だ。強くてデカイけりゃなんだっていい。

獣の様な男に、女は誰だって仰け反るほど感じたんだ。激しく強く抱けば、愛されてると思ひ込むバカな生き物だ。いくらインテリぶったって本能には逆らえない。一度交わった女は、何でもかんでも男に甘えたがるが、股ひらいた女に優しくする機能は、男にはない。

「ぶざけろ。お前が出るよ」

「……おねがい」

と、まあ、甘い声で言われりゃ、失せた気力に多少の励みとなる。チツ、と舌打ちをしつつ電話の受話器を上げ、鳴り止まないコールに終止符を打った。

「おはようございます。フロントです」

「ああ、おはよう。クソみたいな朝をありがとう」

「10時5分が過ぎました。モーニングコールで御座います」

「ああ、わかってる。おつかれさん」

受話器を置こうとすると、「あ、香取様」フロントマンの声。

「あ？ なんだ？」

「先程からご友人の方が、ロビーで香取様をお待ちしているのですが……」

友人だつて？ 冗談じゃない。

「わかった。すぐ行く」

「では、その様にお伝えしておきます」

ガチャ、と受話器を置いて、温いベッドから重たい体を起こした。ブラインドから差し込むレーザービームがオレの背で遮られる。

ジリジリと、陽の熱を感じる間もなく、オレはゆっくりベッドから抜け出した。

リビングへ向かい、昨夜、床の上に飲み散らかしたシャンパンボトルやビールグラスをよけながらパウダールームまで辿り着く。隣のシャワールームに片足をを入れて水を止めて、洗面台の水で顔を洗い流した。すっきりした顔で、歯磨きをしながら短い髪を手でかして、口をすすいだ。

リビングに戻って、脱いだボクサーパンツを履いてから、中古のジーンズとTシャツ。紺のシャツを重ねていくつかボタンを留めた。スニーカーをどこに置いたか探してる途中で、テーブルの上の携帯が鳴った。

ディスプレイを除くと表示された電話番号。

個人的な客だ。

電話番号だけの表示は客。

いちいち客に名前をつけるのもバカバカしい。

ついでに言うなら、15日と月末以外はオーダーを取る日じゃない。

電話の内容はわかってる。きれた薬の取引時間を再確認したいだけだ。

ソファの横に転がったスニーカーを履いて、バカバカしい客の電話を無視する。直に鳴り止むコールは、バカバカしく続く。その間、ベッドルームへ道しるべの様に脱ぎ捨てたデニムとキャミ、ブラウスと下着を抱えて女の寝るベッドまで持って行く。

掛け布団から頭だけを出して、夢の中をさ迷う女の上に衣類を投げた。

「11時にチエックアウトしとけよ」

オレの声にモソモソとベッドの中で反応する。

気だるそうな顔を布団からひょっこり出すと、まだ開き切っていない瞳でオレを見上げた。

「頭イタイ……きのう、何杯飲ませたんだよ」

「最初のカクテルだけ、後はテメエで飲んでたろ」

「うそつけ」

高橋 たかはし  
春花 はるか

オレの通う大学の同級生。

学部は違うが、オレの高校ん時の知り合いの泉ってヤツの女友達。コイツがまたいい女なんだ。乳もけつもデカイクせにスタイルがいい。

顔も服もオレ好みで、派手でもなきや地味でもない。明朗活発って表現が一番しっくりくる。時々、そのサバサバした性格が腹立たしくも思えるが、良心的な行動から好かれはしても憎まれはしないだろ。誰にでも分け隔てなく接し、世話好きで面倒見がいいのは、リアルに弟がいるからのようだ。

コイツの姉貴肌は、オレにまで口うるさく迫ってくる。

やれ学校にこいだとか、やれキャンパスでビジネスをするなどが色々だ。

オレはコイツに、飲みにつき合ってくれるなら約束する、という

交換条件を出す。コイツは、酒が弱いくせに交渉を成立させ、酔った勢いで一発やらせる。昨夜でコイツとやったのは2度目で、交わした約束は2つ。なんでそこまでしてオレにまっとうな道を歩んで欲しいのかわからない。おおかた弟を投影してるんだろっか　ど　うでもいいか、そんなこと。

オレはベッドに腰を下ろして、春花に顔を近づけた。親指で唇をなぞったあと、ゆっくりと唇を重ねる。

微かに開いた春花の口の中へ舌を侵入させ、しっとり絡め、音を立てて唇から離れた。

「もう1発やりたくなっただか？」

春花は、頭を置いた枕を持ち上げて、オレの顔面へ押し当てながら言った。

「バカじゃん」

「泉が聞いたら腰ぬかすな」

「最低、誰にも言うなよ」

「ガキじゃねえんだ。いちいち言いふらすかよ」

「もう、行くの？」

「ああ、仕事だ」

「学校は………？」

「今日はパス。でも、約束はちゃんと守る。休みあけにでも行くわ」  
「そう……よかった」

オレはバカな女を散々みてきた。

頭が悪いくせに策士気取りで、悪知恵を働かせる。  
女であることが有利だと思い込んでいやがるが、オレから言わせれば、そこにつけている隙があり、女を騙すのは簡単ってわけだ。だが、春花は少しそれとは違う。もっと素直ですれてなく単純だ。言い換えるなら純粹。騙す必要もない。

その場に立ち上がったオレは、春花に背を向けてベッドルームから出て行くこうとしたとき「カトケン」 呼び止められた。

「あ？」

振り向かずその声にオレは答えた。

「もう1回してあげる」

「はあ？」

「だから、その仕事……」

「できない約束をしねえの知ってんだろ。  
てっとり早く金が欲しい。時間がねえんだ」

「わたしのバイト……」

「時給いくらだ？ くだらねえこと言ってるなよ」

「なんでそんなお金が必要なの？」

「関係ねえだろ」

「関係なくない」

オレは沈黙を残してベッドルームから出た直後、春花は状態を起こしたのか、バサツ、と布団の音が聞こえた。

「カトケン、気をつけるんだよ？」

「うるせえ」

クローゼットからコートを取り出し着たあと、テーブルの携帯をポケットへ入れる。部屋のドアの前でフードをかぶりホテルの部屋を出た。

エレベーターを使ってフロントまで降りたオレは、広いロビーを見渡す。

見知らぬ顔ぶれを眺める中、ひとりの男と目が合った。

汚い格好をした男は、手に持った雑誌とオレの顔を交互に見る。どうやらあのおっさんが、オレの『ご友人』らしいな。

おそらく男は、雑誌の内側に忍ばせた携帯の画像とオレを見比べているんだろ。初仕事は誰でも緊張する。しよっぱなから人間違いなんてしたくもないはずだから、男の拳動は当然と言えば当然だ。

それにしても、見すぎだバカ野郎。

オレは軽く手を上げ合図して、地下駐車場まで降りていく。ふつうは、接触してくるのは向こうからだ。オレは相手の顔を知らされてない。だが、あんなだけ不思議な動きをされちゃ、ここにいる、と大声で呼ばれてる様なもんだ。

乗って来たバンに乗り込みエンジンをかける。

呑気にH a l oと表示されるカーナビを操作し、目的地の入力をしていく。

助手席には例の男。今回の集金係が座る。

「あんだ、いつもこんな遅刻するのか？」

ダッシュボードの上に雑誌を投げ置いて、シートを倒すと隠れるように座った集金係は、キョロキョロしながらそう言った。

「遅刻がなんだよ。んなのは、目安だろうが」

「でもよ……」

「関係ねえよ。テメエは金を受け取り、オレは安全にものを運ぶ。重要なのは時間じゃねえ、無事であることだ」

「信用つてのも大事だぜ？ 待ってる方の身にもなってみるよ」

「ビビってんじゃねえよ、おっさん」

「ビビってないけど……おい、早いとこ車だそうぜ」

オレはたばこに火をつけてオーディオの再生ボタンを押し、車を走らせた。しばらくの間、集金係はソワソワする様子を見せるだけだった。二人の間に会話はなく、走行音とステレオから流れるWest Coast hip hopが社内を包んでいた。

高速に乗ったところ、集金係はようやく落ち着き、車が走ってから最初の言葉を発した。

「どこへ行くんだ？」

「山梨に向かっている。そんな次は埼玉、最後に東京だ」

「今日中に全部終わるんだよな？」

「あ？　なんで？　大事な用でもあんのかよ」

「そうじゃないが……」

「だったら黙ってる」

どんな世界にも最低限のルールってのがある。

何も難しい話じゃない。遅刻すんなとか、挨拶はしろとか、簡単なルールだ。

もちろん、この世界にもそんなルールは3つある。

その日までに仕事を終えること。警察に捕まらないこと。

一番、大事なのはあれこれ考えないことだ。

「どのくらいなんだ？」

「あ？」

「この仕事、あんたどのくらい続いてる？」

「一年ちよいだ」

「どんだけ稼いだ？」

「一千万つてとこだろ」

「あ、あんた学生だろ！？」

「副業もしてる」

「社会人なのか」

「いや、同じ様な仕事だ」

「へえ、そうか。こついうのにも掛け持ちってあるんだな」

「まあな」

「そう言えば、電話してきた男。マツイとか言ってたっけか？」

「指示してくる奴か？」

「ああ、あいつがこの組織の……」

「おっさん。家族は？」

「岐阜に両親がいる」

「この仕事はじめてなんだから」

「ああ、そうだが？」

「なら、いいこと教えてやる。」

パパとママを泣かせるようなまねはしない方がいい」

集金係は、乾いた笑いを見せたあと言った。

「まさか、年下に説教されるとは……」

「そうじゃねえ。生きていたいなら、いちいち詮索すんなって言うてんだよ」

「え？」

名前も過去もない。

ただの運び屋と集金係。

それだけの関係で、仲間でもなけりゃ知り合いでもない。

この世界じゃ、お互いを知る必要はないし、飼い主を知ろうとするヤツもいない。

みんな自分が大事だからだ。

死にたいヤツは好きにすればいい。でも、巻き沿いはごめんだ。

人間関係の煩わしさが無いのが、この仕事のいいところだし、報酬も高い。

リスクはおしゃべりなヤツと欲をかくヤツに、命という対価が請

求される。

「黙って寝てるか、雑誌でも読んでろ。じゃなきゃ、テメエはここで降りてもらおうぞ」

「わ、わかった。ただ、ちょっと聞いたただけだ。怒るなって……」

2014年3月7日。

17時55分、定時まであと5分。

ここ三和電子株式会社には、続々と営業さん達が帰社してくる。

「おかえりなさい」

外回りを終えて帰ってくる社員に、挨拶をするのも私の仕事。

赤坂見附の駅から数分の飯田ビル。

その4階のフロアにこの会社はある。

社名で何となくわかるかな。電子部品を取扱う会社なんだ。

社員数は40名程度で、売上高9億円未満の零細企業。

でもね、取引相手の8割くらいが、あのSONYの関連企業なん

だよ。

たぶん、スゴイよね？

なんか詳しくは知らないんだけど、社長が元々SONYの社員だったのか、そんな時のコネを利用して仕事を貰ってるらしい。残りの2割はパチンコメーカーとか、営業さん達が新規で開いた口座なんだから、だから、不況には敏感な会社なの。

去年は一年通して受注率が下がっちゃって、来年の見通しも暗くて、このままだと本気でやばいんじゃないかって時に、年末に販売されたSONYの新製品が好調な売れ行きを伸ばして、うちはあやかり助かり、みたいな奇跡的な展開を迎えたんだ。

来年はどうなるんだろうなあ。潰れてほしくない。

社長いい人だからっていうのもあるけど、就活がまじで嫌だって言うのが本音だよ。

正直、あの地獄みたいな日々は、もうたくさん。

就職氷河期なんて、今に始まったことじゃないけど、年々厳しくなってるって聞くし、私が大学卒業したあの時よりも、今はもっと酷いと思うとゾツとするよ。なにげに、私が入社できてるのだって奇跡っていうか、偶然っていうか、なぜかここにいるみたいなきんだよ。

愚痴を言い出したらキリがないよ。

電子部品なんて興味ないし、意味わかんない。

できれば、LANCOMランコムとか資生堂とかの化粧品ブランドで、企画をやりたかった。あ、お菓子メーカーのマーケティングとかもいいよね。けど、3流の無名な大学出の私には、縁がない贅沢な希望ってことで、毎日、謎のパーツに囲まれながら経理をしてる。す

ごく地味でひま。簡単な総務的な仕事为中心で、他には請求書を送ったり受け取ったり、月一で在庫管理してみたり、経理らしい仕事って言えば経費の計算くらいかな。あいた時間でヤフオクとか楽天シヨッピングとか見てたりしてる。それでも時間あまるってどうなの？

決定的なのが男性社員が多い。

それはこの際よしとして、数少ない女性社員も年上か無愛想な子が多い。

髪の毛を切っても新しい服を着て行っても、基本、誰も何も言ってくんない。

私に興味ないのか、人に興味がないのか、趣味合いそう人なんて探すだけ無駄。

一生、ここで終わるのかなあ。

転職なんて今は考えてないし、出会いだってあるわけじゃないから、年取ってSkypeとか掲示板とかに出会いを求めちゃうのかな。わあ、こわい。

とりあえず、悲観したってしょうがない。ガンバロー。

働けてるだけマシだと思わないとバチが当たるね

それにぜんぜん気が合わない人だけでもないんだ。

ちゃんと仲のいい子もいる。その子達と一緒に、次は婚活かな。

△。 18時00分、カチって壁時計の針の音と共になる終業のチャイム。

机の上の整理は、5分も前から終わってる。

あとは電卓を机の定位置に戻して終了。

1本に結んだ髪からシユシユをほどいて、腕にかける。  
大きく伸びをして、私は席を立った。

よし！今日はダツシユで会社だよ。

「お疲れ様でした」の挨拶を残して足早にロッカールームへ移動した私は、自分のロッカーの鏡の前でメイクと髪を念入りに直してた。

「大島さん」

これ、私の苗字。

ちなみに名前は、なつき。

「ん？」

チラッと、横目で声の主を確認する。

「あ、おつかれ、ひなちゃん」

北原きたはら 陽向ひなた

自分の名前にコンプレックスがある女の子。

別に変じゃないと思うけど、名前の話になると「大島さんみたく、ひらがながよかった」なんて呟いてる。漢字でもひらがなのどっちも可愛いよね。

あと彼女には、もうひとつコンプレックスがあって、超小柄で童顔。

よく高校生に間違われるらしくて、18のとき運転してたら警察に止められたんだって。それはちょっとひどいと思うけど、羨ましいコンプレックスだよ。

「これから遊び行くんですか？」

「うん。まあね」

「ああ、やっぱりかあ」

「どうして？　なんかあった？」

「六本木、行こうかなって思ったんですけど……」

「ごめんね、今日むりなんだ。美加は？」

「美加さんも今日だめだって、最近ノリ悪いんですよ。なんか聞いてません？」

岩佐 いわさ 美加 みか

この会社でひなちゃんに続いて、仲のいい友達。

ひなちゃんの2つ上で、私と同じ年の25歳。

長身のスタイル抜群でしっかり者、典型的なお姉さんタイプ。

仕事も営業アシスタントの中で一番できるし、私にもひなちゃんにも話を合わせられる『女性』だね。

「何かあって？」

「うん、男できた、とか」

「んー、どうかなあ、それらしいこと言ってなかったけど……」

私は出る準備を終えてロッカーの鍵をしめ、ひなちゃんへ振りむ

いた。

「けど？　なんかあります？」

「え、あ、うん。なんか、暗くなっただっていうか、落ちてるっていうか、大人しくなった？」

「ああ！　わかる！　なんか最近、違いますよね？　雰囲気」

うまく説明できないけど、さすが、ひなちゃんには伝わったみたい。

前とちよつと違うんだよね。やけに冷めてるっていうか、急に思いふける時がよくあつて集中してない感じがするんだ。知り合つて3年近くそんなとき無かつたのに、少し心配はしてるけど、聞いただそうとしても「なんもないよ」の一点張りだから、それ以上つくく訊けないでいる。

「やっぱさあ、絶対、男ですよ。彼氏できてすぐ振られたとか、やり逃げされたとかだ！」

ひなちゃん盛り上がってきてる。

「やり逃げつて、美加に限つてじゃない？」

「んじゃ、不倫だった？　彼女いる男、好きになつたとかは？」

「ああ見えて意外と男に狂つちゃうみたいなの？」

「そうそう！　あるよね？」

かるく話に乗ってあげると、ひなちゃんの興奮は徐々にマックスに近づく。

ちよつと声でかいしっていうか、ひなちゃんの欠点はそこにあるんじゃないかなと、思ったら案の定だった。

「誰が狂っちゃうって?」

痛そうな表情をするひなちゃん。

私とひなちゃんの間を割って入ってきた美加は、興味津々な様子でそう言った。

「あつと、それ大島さんですよ」

責任転換。

あ、違うか。言ったの私だ。

「ごめん、ちよつと心配で……」

ひなちゃんに指を差された私は、むりやりな言い訳を考えてた。

「で、人の男を勝手に妻子持ちにしたの?」

美加はいじわるな表情で、私にそう言って、隣のロッカーの前に立った。

「別にいいけど……なんもないから、今日はちよつと友達と約束が入ってるだけ」

「ですよねえ、で、ホントのどこ美加さん彼氏できたの?」

ひなちゃんのすごいところってこの食い下がる姿勢ね。  
私なら恐ろしくて、この空気の中、訊けない。

「ホントのそこ、なんにもないの。ごめんね、ひなちゃん。  
それより私はなつきの予定の方が気になるけど?」

「あ、ですよねえ。あたしもそれ思った」

思うなよって。

美加も私に話をふらないでよ。

っていつか、仕事終わってから予定あるとか美加に言っていないの。

「スカート履いちゃって、昨日、美容院も行ったのかなあ?」

「ですよねえ。髪、超きれいだし、さつきもばっちりメイクしてたし、これ絶対彼氏じゃないですよねえ?」

「ちよつとふたりとも……」

二人の視線が痛い。

自分の目が泳いでるのがわかる。

こんなとき、二人の関心は邪魔になるね。

「ふ、ふつうに合コンだよ」

「えっ、なに、それ? きいてないですよてか、誘われてもねえし  
!」

ひなちゃんのオーバーリアクションに、驚いた私へ美加が言った。

「彼氏、アキヒロくんだったっけ？　かわいいそう」

「宏明なんだけど……ていうか、べつにただの飲み会と同じじゃん」

「彼氏にもそう言っただけだ？」

一応、女子会って言うてある。

黙り込んだ私に、美加は嫌らしい笑みをみせた。  
完全に反撃された。

「てかてか、誘われてないって！　ずるいですよ！　私いつも誘うのにい！」

「ごめん。最後に誘われたからさ。今度ね」

ひなちゃんは、頬を少し膨らませて興奮してた。

「ゼツタイだよ」

「うん、絶対。じゃ、じゃ行くね」

とりあえず、早く逃げといた方がいいよね。

「約束、忘れないでね！　いってらっしゃい」

「なつき、その話、ちゃんと教えてよ」

「あ、うん。んじゃ、おつかれ」

二人に手を振って、私はその場から早々に立ち去った。

「大島さん、今日ゼツタイやりますよね？」

「ひなちゃんじゃないんだから……ノリでする子じゃないでしょ」

「てか、あたし、べつにノリでやってないんですけど……」

2014年3月7日。

18時15分、パソコンの電源を切り、ファイルをデスクの引き出しの中にした。全ては計画通りにはいかない。オフィスを見渡せばよくわかる。定時が何時だったのかすっかり忘れてしまった様に、仕事に取り付かれたスタッフ達が動き回っている。みんな週末に仕事を残したくないのだろう。

俺も同じだ。

予定していた打ち合わせが長引き、次のコンペの資料を作るのに遅れをとった。

頭にイメージした内容が、うまく言葉にできない。書いては消しを繰り返し、あつと言う間に時間が経過した。数ヶ月も前に約束し

たプライベートな予定が差し迫る中、俺はひとつの決断をした。

「また休日出勤？」

スーツにコート。マウラーと手袋で完全防寒の真理子が立っていた。

「予定が狂った。今日は友達と約束があるんだ」

「週末に仕事するのやめたんじゃないの？」

「今は誰にも迷惑かけないだろ」

「そうだね。主任になるといろいろ、仕事に遊びに、忙しいんですね」

「からかうなよ」

「からかってないよ。うちら同期の星だって褒めてるだけ」

俺は、鞆とコートを手に持ち、スーツから車のキーを出して真理子に言った。

「駅まで送ってくよ」

「いいよ」

「俺も新宿なんだ」

「そっか。じゃあ、よろしく」

俺は真理子に乗せた車で、新宿へ向けて走っていた。

「タバコ吸っていい？」

「どうぞ」

真理子は助手席の窓を少し開けて、細いメンソールに火をつけた。

「ずっと続いているの？」

「ああ、やめてから吸ってない」

「愛煙家は肩身せまくなったなあ、悪いことしてるみたいに見えるし」

「お前もやめればいいだろ」

「冗談。流行りに乗るのは主義じゃないから」

「こづいこの流行りって言うのか？」

「言うんじゃない？」

「なんでやめたの？」

「1本で6分。ひと箱で2時間、寿命が縮まるらしい。」

何も食べなければ、餓死するから食事をとる。タバコはその逆。

もし、すぐに死にたいなら、もっと簡単な方法はいくらかでもあるは

ずだろ」

「それ早く死ねって言ってるの？」

「違う。馬鹿げてるって言ってる」

「自分だって吸ってたくせに……その変わりよう」

「だから、やめた」

真理子は少し考えて、何かを思いついたように言った。

「あつ、禁煙外来、行った？」

「ああ」

俺の返事を聞いたあと、真理子は笑いながら言う。

「ちょっと、真面目な話、やめた本当の理由なんなの？」

「服も臭くなるし、壁紙も黄ばむ。」

それに次の部長、吸わないらしい。オフィスの喫煙室とっぱらうって話だぞ」

「それまじで？」

「……らしい。噂だけだな」

「ますます肩身せまい」

「人事に影響する前にやめといた方が無難だろ？」

「まあね。優斗の場合は、特になら」

『6時30分になりました。ニュースをお伝えします。』

本日、昼すぎに東京、井の頭公園の池から発見された、幼女の遺体の身元が明らかになりました。警視庁は、先月24日から三鷹市で発生した失跡事件しっせうの被害者である田中 桃香さんと断定。殺人事件に切り替え捜査中とのことです。また、先程の記者会見で、未解決の連続幼女誘拐事件との見方も強めており、関係性を調査中と発表しました。それでは、中継の……』

テレビから聞こえたニュースは、最悪な展開に発展した事を告げていた。

「音楽」

「ん？」

テレビが中継に切り替わるとき、真理子は小さく低い声で言った。

「音楽に変えていい？」

「……ああ、構わないけど」

真理子の指は、俺の返事のと素早くオーディオの再生ボタンを押した。

静かなメロディに美声から始まるCome Back TOM  
e / Janet Jacksonが車内に流れ出す。

「最近、増えたよね」

「事件か？」

「うん」

「そうだな。不思議と犯罪が増えてる気がする。景気のせいなんだろうけど、ああ言った類の事件は関係なさそうだな」

犯罪データが手元にないから詳しい話はできないが、2011年以降、凶悪犯罪は年々増加している様に俺は感じていた。それは単に日本経済の衰退が影響しているとは、言い難い快樂的な事件が多く含まれているようだった。

失踪、レイプ、拷問殺人。

そのどれをとってもサイコキラーやシリアルキラーの枠に収まる事件ばかりで、日本の犯罪史が欧米化にむけて、また一歩近づいているかのように感じる。もう関係ないと思えるほど遠くなく、明日は我が身と思えるような警戒心が、俺達に知らず知らず根付いてきているのかもしれない。

「どうかしたのか？」

「なんでも、ないよ」

明らかに様子が変わった真理子の表情と声。

あまり人のプライバシーに、踏み込むのは良くないと知りながら敬遠する仲でもあるまいし、俺は軽い気持ちで続けた。

「そうか。お前、吉祥寺だもんな。事件のあった付近に住んでるん

「だろ？」

「え、そうだね」

「安心しろよ。お前を襲う悪趣味な奴はいないよ」

「冗談のつもりで投げた言葉に手ごたえは感じなかった」

「そうだね」

「おい、どうした？ 本当に大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

「話せないことじゃないなら言えよ。気になってタバコ吸いそうだ」

少し頬の力が緩んだ真理子の口から小さな笑い声が聞こえた。

「ありがとう。主任」

「大事な部下だから、当然だ」

「言えないことじゃないし、わたしの身に何かあったってわけじゃないけど、思い出すんだ。ああいう事件を聞くと」

「なにを？」

「実は……」

2014年3月7日。

18時16分、腕時計の長針がひとつ右に移動する。1分を刻んだ。

少し会社に長居したせいで、集合時間ギリギリの時刻になっちゃった。

会社から一番近い出入口の階段を下りて、地下鉄の改札をくぐって駅のホームに私は降り立った。

駅はラッシュ客がひしめき合い、電車待ちのレーンはどこも長蛇の列が出来上がってた。

すごい人だよな。

毎日、毎日、こんなに人っているんだ。

たしかに当たり前なんだけど、改めて見るとすごいなって。

この駅だけしかないならわかるけど、他の駅も同じくらいいるじゃない。

それも他の線だって 全国の今の時間帯ってどこもこんな感じだったりして、そうだとしたら日本人の人口って本当に1億人でおさまるのかな。

私は適当な列の最後尾にならんだ。

私の前には既に5人の人がいて、ひとつのレーンに二列ずつ。毎日、行き帰りは混雑するけど、つらいのは電車が着てからだ。朝や終電ほどすし詰め状態にはならないけど、後ろからグイグイ押してくる人とかいて、ムカツク。それだけならまだマシな方。足を踏んづけられたり、ひどい時には気づかない間に、アザが残るくらいぶつかって来る人もいるんだよ。

今日は、楽しいことが待ってるから救いになるけど、いつもは家に着いたころ、心も体もヘトヘト。映画みたいなスマートなビジネスライフっていろいろを送ってみたいな。

腕にかけてバッグの中から携帯をとって、彼氏宛のメールを作る。会社が終わってたっていうのと、これから飲み会に行ってきますって内容。

彼氏の知ってる私の友達には、話を合わせてもらおうように言っているから、これで遅くなっても心配ない。ちょっと気持ち悪いですよ。でも、男の影を少しでも感じただけで、すごい言われよう。あげくに手まで出てくるから怖い。

「なんで別れないの？」ってよく言われるけど、話がこじれるのが面倒くさいんだよね。逆上した彼が何をしてくるかわからないっていうのもあるけど、本当のことというところ自然消滅が一番いいかなって思ってる。お互い連絡とらなくなって、何事も無かったようにそのままバイバイしたい。お互い傷つかなくて済むし、なにより楽しやん。

たぶん、私は彼を好きじゃないと思うんだ。

会えばケンカばっかだし、顔みても嬉しいとか思わない。

今はなんとなく縛られてて、なんとなく連絡が来るから返してる。私から電話することなんてない。もうかなり冷え込んでるね。

だから今日の集まりに期待してるの。

ああ、ひなちゃん達には合コンとかって言ったけど、同窓会だよ。ひなちゃんには、怖くて真実を言えないよ。あの子いい子だし、すごく可愛いんだけど、遠慮しないうえに言葉遣いが汚い。同窓会に気合いれてくとか知られたら何を言われるかわからないよ。本人はぜんぜん悪気なくて、私と美加には気を遣ってくれてるから気に入らんまならないけど、最初は見た目のギャップにはドン引きしたよ。

正直、私も同窓会だから気合入ってるってわけじゃないんだ。私の興味は、そこに来るある人。

同じ高校の櫻井くんって男の子がいるんだけど、「同窓会みたいなことしようぜ」って前に電話がきて、一緒に遊んだときにその人も来てたんだ。もう、なんていうか、ひと目惚れだよ。かっこ良くて、おもしろくて、優しく、大人で、私の好きになる要素が全部そろってて、運命っていうのを感じちゃった。高校の時はあんま話したことないと思うっていうか、遊んだりした記憶ないんだ。なんとなくしか憶えてないんだよ。不思議だよ。あ、でね、最近、彼女とも別れたって聞いたし、そろそろ距離縮めちゃってもいいんじゃないかなあって思ったから今日は、がつつりアピってこようと決めたんだ。

うまくいけばさ、乗り換えられるっていうね。

「チツ……!!」

「あ、すみません」

私の背中をグイって、押す男の子について来た声に疑問を抱いた。

邪魔になる位置に立ってたわけじゃないよ。

ぶつかって来たあいつが悪いのに、なんで私が謝らなくちゃいけないの？

私は不満げな表情で、その男の子の背中を目で追った。

黒の綿パンに、大きめな黒のダウンジャケット。黒のキャップ。

色彩センスがないのも程がある黒ずくめ、年齢は17、8歳の高校生くらいかな。

男の子は隣のレーンで立ち止まり、列の3番目に割り込んだ。

若い子達の品位を疑う典型的なマナー違反に、男の子の直後のおばさんは怪訝な表情で睨むように見つめてる。当の本人は、何事もなかったかのようにキャップを深くかぶり下を向いたまま、おあばさんの視線を無視した。

さすがにひどい。

私は一瞬、周りを見渡す。

男の子の前に立つ女の人は、後ろの状況に気づかず前を向いて電車を待ってる。あとは、携帯をいじっている人や新聞、雑誌に集中している人。時間に気を取られ、割り込みの瞬間を見落とした人。これだけ人が大勢いるのに、私以外は誰も割り込みに気がついてない。そんなことって きつと見て見ぬふりしてる人もいるんだ。それにしても目に余る行為。

私が、いかなくちゃ？

え、でも、なんで私？ 他の人も見てたんでしょ？

それに「うるせえ」的なこと言われたら、なんて言えばいいの？

ていうか、その前にあいつに何を言えばいいの？

「ちよつとあなた……！」

割り込みをされたおばさんが、平然と前の男の子へ声をかけた。私がどうこうする問題じゃなかったみたい。すごいパワフルだなあつて感心したのもつかの間、おばさんは声を無視した男の子の肩を、トントン、と叩いたときだった。えっ？急に前に立っていた女の人へ覆いかぶさるように、男の子は激しく倒れ込んだ。

目を丸くきよんとしたおばさんの表情。

押したんじゃない。かるく叩いただけ、驚くのも当たり前だった。きゃあ、と女の人の僅かな悲鳴の直後に男性の低い絶叫する声と、ドサツ、という鈍い音。その場にいた人の視線が、線路へ一気に集中した。

一瞬のできごとに、何が起きたのか、私の頭は整理ができなかった。

周りの人達と同じように、少し背伸びをして線路を覗き見ようとかんばつたけど、よくみえない。

「人が落ちたぞ！」

人だかりができる中、誰かがそう声を張り上げて言った。

私の視界にも一瞬、男性の後頭部らへんが見えた。帰宅ラッシュの駅構内が騒然とした瞬間だった。

集まる人の背が、私の目の前に壁となって視界は奪われていく。

え、なに、コワイ！

急に全身が震え出すのがわかった。  
両手はこぶしを握り、足に余計な力が入る感覚。

「電車とめないと！ 駅員！」

また誰かの声が、野次馬の中心から漏れ出した。

ざわつく駅は、事故現場の状況が口コミされ広がっていく。  
男性が線路に落ちた。私は、無駄に聞こえてくる声から目の前の  
状況をようやく理解できた。

あの男の子！？

すぐに辺りを見ても彼の姿はみえない。

人の壁のせいでみえないのか、もうここにはいないのか……。

『ただ今、当駅構内で、飛び込み事故が発生したため……』

駅構内に事故のアナウンスが流れはじめると、担架を持った駅員  
が到着した。

「血だ！ 血が出てるぞ」

また別の誰かがそう叫んだあと、周りの人だかりも、ざわざわ、  
とわいた。

私は、この場からすぐに立ち去りたいという衝動に、動かない足  
に力を入れて、後ずさりをする。

なんで、こんなに怖いのか？

わけのわからない恐怖が、執拗に私の身体を包み込んでいく。

ピタッ、と手の震えが止まったと同時に、手首に重くのしかかる  
感触が伝わった。

反射的に手首を見つめる私。

グッ、と握られた手首は、後ろに立つ会社員風な男性の姿だった。

「痛ッ！」

力強い男性の手に私は悲痛な声をもらす。

「見ましたよね」

事故現場へ視線を向けた男性は、独り言の様に言った。

「え？」

ギロツ、と男性の黒目が落ち、私と目が合う。

「は、離してください！」

この人、なに言ってるのかわかんない。

見たって、なに、事故のこと？

男性の血走った目は、興奮状態なのが良くわかった。

「一緒に、行きましょう」

「え！？」

どっどこ？

「警察に行きましょう」

私は、上から下に力いっぱい手を振り払って、男性の手をほどいた。

「私、なにも知らない！ 見てないから！」

気が付けば私は、大きな声で男性に向かって言っていた。

私の言葉を想像してなかった様な表情を浮かべる男性。

いくつかの視線。目立つちゃった恥ずかしさと、さっきから続いている恐怖が、地面を強く蹴ってもと来た道を戻らせた。

地上に上がる階段を走ってた私の頭には、男性の言葉がうずを巻く。

どうして自分が警察に行かないといけないのと、自問し、突き飛ばしたのはマナー違反の男の子だと、自答した。

地上に出た私は、すぐにタクシーを拾って新宿へ向かった。

車の中で、全ての握力を使い果たしたような、感覚のない両手を重ねて、震えがひくのを待った。

私は、関係ない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5784v/>

---

GANTZ ~ Another dimension revival ~

2012年1月6日16時50分発行